拾六編ノ

本曾の草

ヘ 13
3180
8

門へ13
3180

全巻十一篇之表題

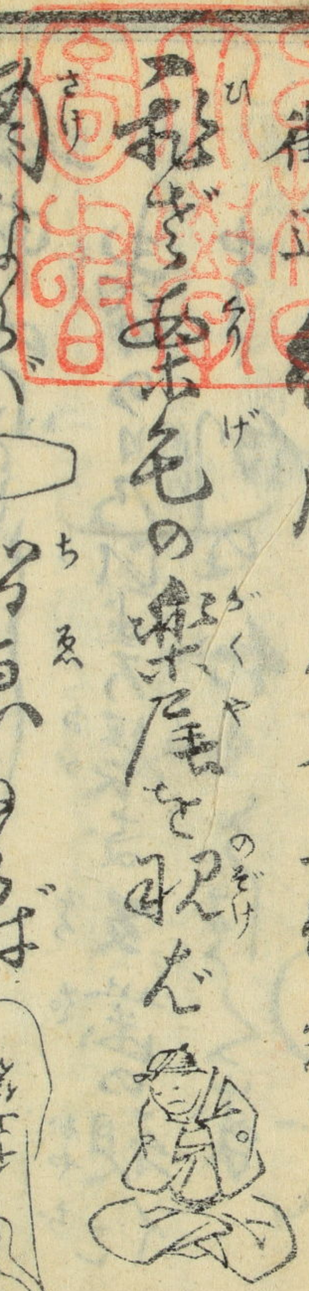
岐蘇街道續膝栗毛編

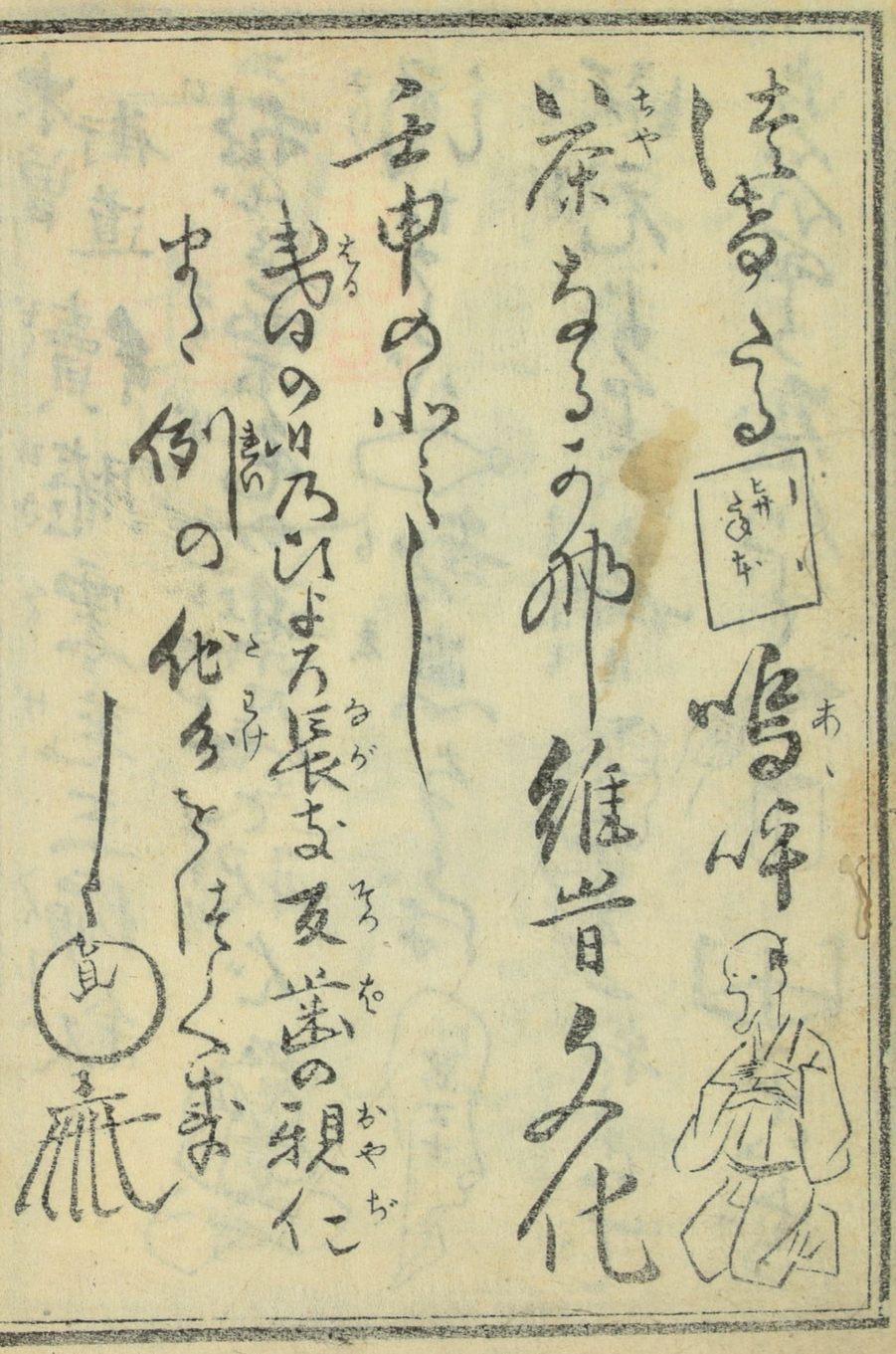
十返舍一九著

完二冊

昭和十年六月二五日購求

木曾街道續膝栗毛三編叙





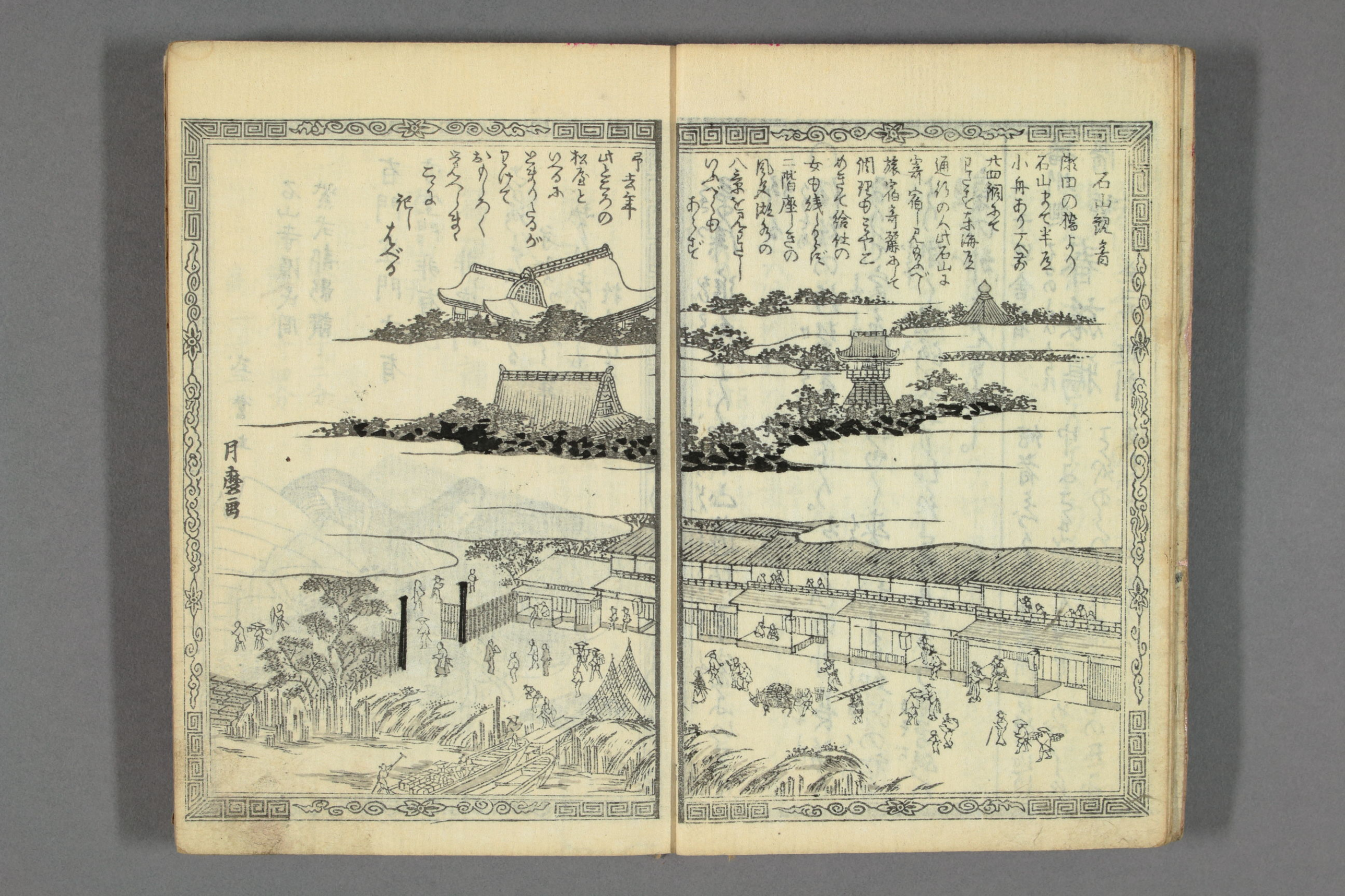
附言

○彌次郎兵衛喜多八なるもの。東都を出て十とせあまり。いまゞ帰らぬ。所今中山道ふかう。こもるむかしの績三篇の編まれども。序文の作者が。枕を剃てあらぐ附〳〵の食言の皮去年上阪乃道ぢらぬ。因下草津湯の大騒動。恙乃身ふ俄病をおこし。遠留〳〵の盛の笑雛ふあひしるおくゝを其外番場の茶屋のまちぶひ。醒が井の秋の芝居。國性爺の虎と孤の間遠

とるいさこき紙おりのみまゝふ山まこの紙向とそ。
拾本曾路ふいとうてあ。あるそゝく。追て改幕ふ
続ひておゝはさべし。
○此編ハ藝州宮島より。中國筋。摂泉名所巡の
おりゝ山紀と。芙ゝとべき順なれども。板元の希そ
まゝ為てさべさる故本曾路とまち隋より。紀州紀
去年さんゝるふ上阪の刻。摂州めぐりせしゝ
る是べ。紀行ハ別ふ表題をかゝくあらさそ
りのより。因而山書ハ。大津駅ゝりさてまり。

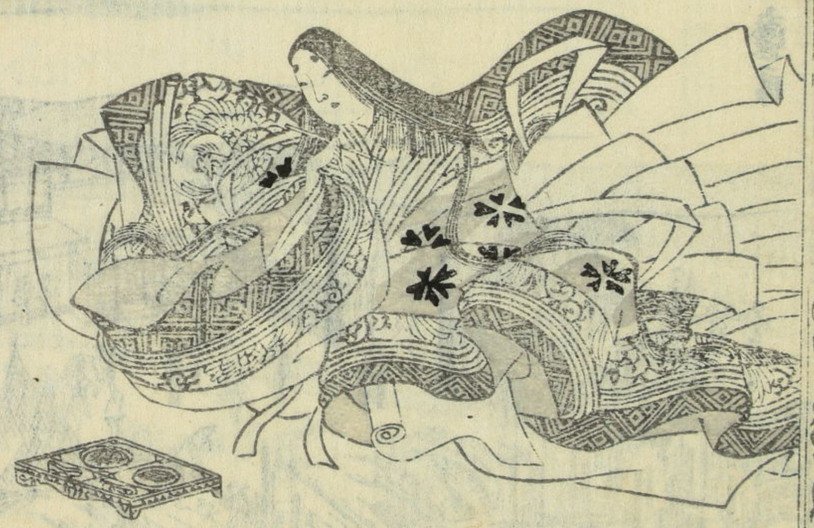
第庫遊ゝより。中山道相原宿ふいゝて
終る
○仮初の伊勢参宮より。おゝひの外長旅と
なりて。実為ふくまもく書をおしゝ。卯月の初旬
より。粥く仮路よおゝもひ立より。そゝり本曾路ハ
夏の部とんものべ。

十返舎著　紙者ゝらゝ山地名所古跡を巡り
播州廻　中よさまぐゝ変せーめぐゝれ
滑稽　春旅鶏　紙あゝゝ狩猟栗毛の駿ふ
全二冊　近刻　晒為より本あり


石山観音
隅田の橋より
石山まで半里
小舟あり二人乗
代四銭なり
日本橋より東海道
通行の人は石山より
寄宿一見あるべし
旅宿寄籠あり
間取もこれ
めきて給仕の
女も綺麗なり
二階座敷の
風交はあり
八畳を五人
いるべしも
あるべし
月蟄画
昔去年
はしりの
松屋と
いるふ
とまりるが
りけて
かりろく
さんろくまで
こそよ
記
たべる

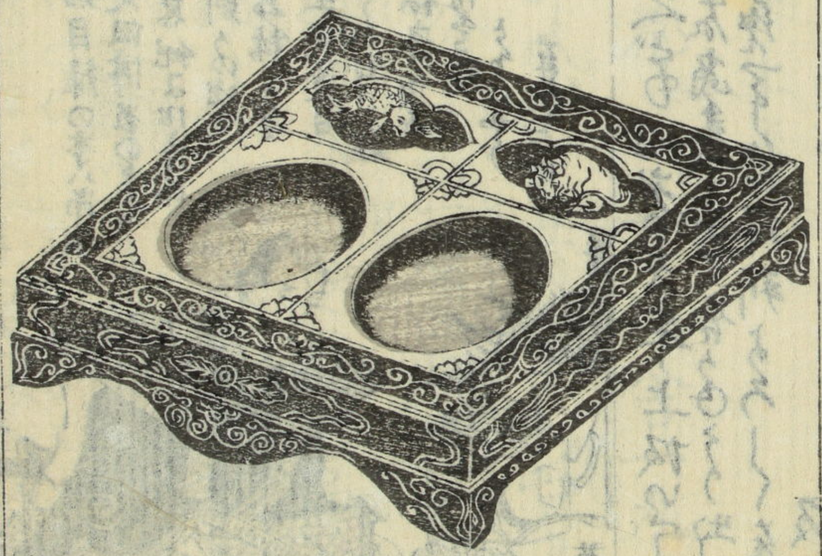
石山寺源氏間
紫式部影讃

有門空門亦有
亦空門非有
非空門



紫式部所持
源氏物語書
寫硯于世謂
石山形硯

竪　六寸二分
横　八寸四分
高　一寸三分



十返舎一九作

通俗巫山夢 全五冊
勝川春亭画

同作
大念仏宝連理隻袖 全五冊
浪花芦洲画

同作
浪花霊場大師めぐり 全三冊

右之外新板著述数多有之候ども他者去年上板いたし殊之外
世評宜しく洛盆前後出仕仕候間うり出し申候
不取敢くわしく進ぜ申候入用之方は早刻御申聞上
以上

右目録の本八帝春
大坂堂島のうち
意他之仕候
則之地の
ゑ林うり
出板近日
うり出し
仕候
仕候
晩
申刻上仕

式磨五

華江武筍

東海道膝栗毛三編上巻

東都　十返舎一九著

笑ひの中ふゑを研といひぺらぺらと昔のことやかりに
れさまれる浦代のありがたさ。一腰の脇指さへ抜ぬ
やうふと陸奥とりひ。生碎も本性迷ひぐさ。ちたねをを
せぎれば往来の乞食銚りのふあゑ素寒ひもの。
大道よあげおさうんで。ゑる鮃うく世の中。干早振
神代ら伝へつけ。人身は法も。小豆飯ふかして上れば。

とてのこよ砂積うけてと。氏神も紅の吉打のひ。
連や湖水をつる山王の神輿さん。血とんぞよ拝撰
う。結坂が物見の松も名のこ殘ア。ゐる居本の赤玉
馬の元宗ゐも妙薬ゐりと。ゐ屋ゐうもゐの紅ことすで
考つけるんのこ殘りの毛旗よ。見戸の山岡ーく。
朝のゐる本曾街道をゑざー。今や東都ゐ屋
ゐる。ゐ江戸ゑ渕をこハか。横州路ゐりさぐて
尼ゑ濤ゐら。神濤のこて紙さうて。山寄街ゐを

伏見ん寄宿ーあくまぐ紙立出て。ゐゆーも
札の辻ゐる追分町ゐぞ出ゐりる

（ちくと此こ　去東ろ　ゐりゆ上本　二編ゐハ）

ちあん宮ぐまぐまうゐでをあゐーられば今年ハ絵彩濤ゐり
なんーうめぐりのこころ他者ゐりゆこ有者ゐりゆこ
ゐるゐるゐうゐうと式ハ名ゐよゐハ大津絵の名物ごゐゐ
計十軒盤ゐぐ家ぐゐよゐ紙ゐんゐうう

軍勢をゐん世ゐよゐぐて商内も
ゐゐ大津の得ものゐるぐー
ゐハ京と伏見んとの追分ゐて。往来張紙ゐ紙ゐれど。

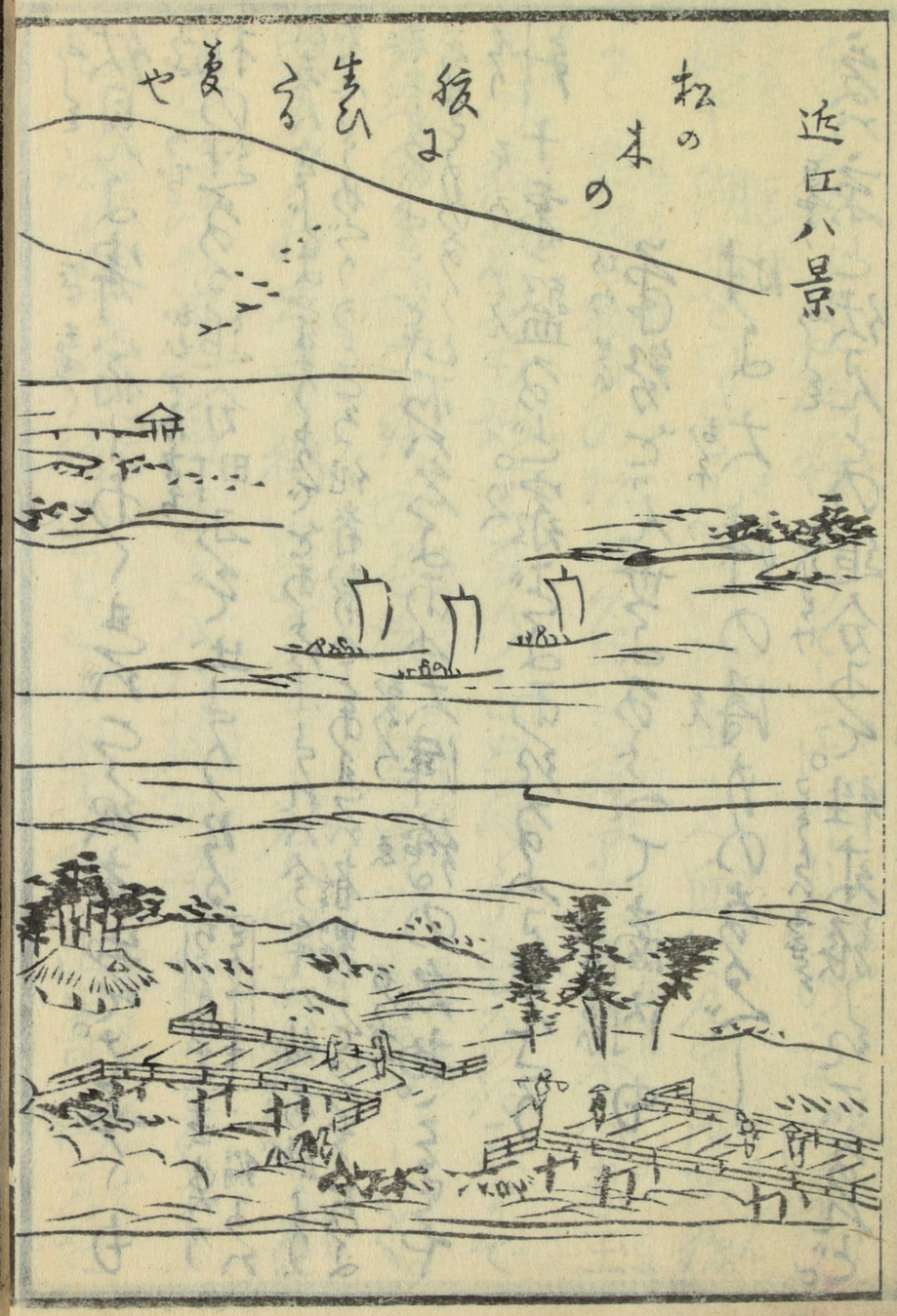
近江八景

松の末の

板よ

生ち

夏や



比叡カ

さきの

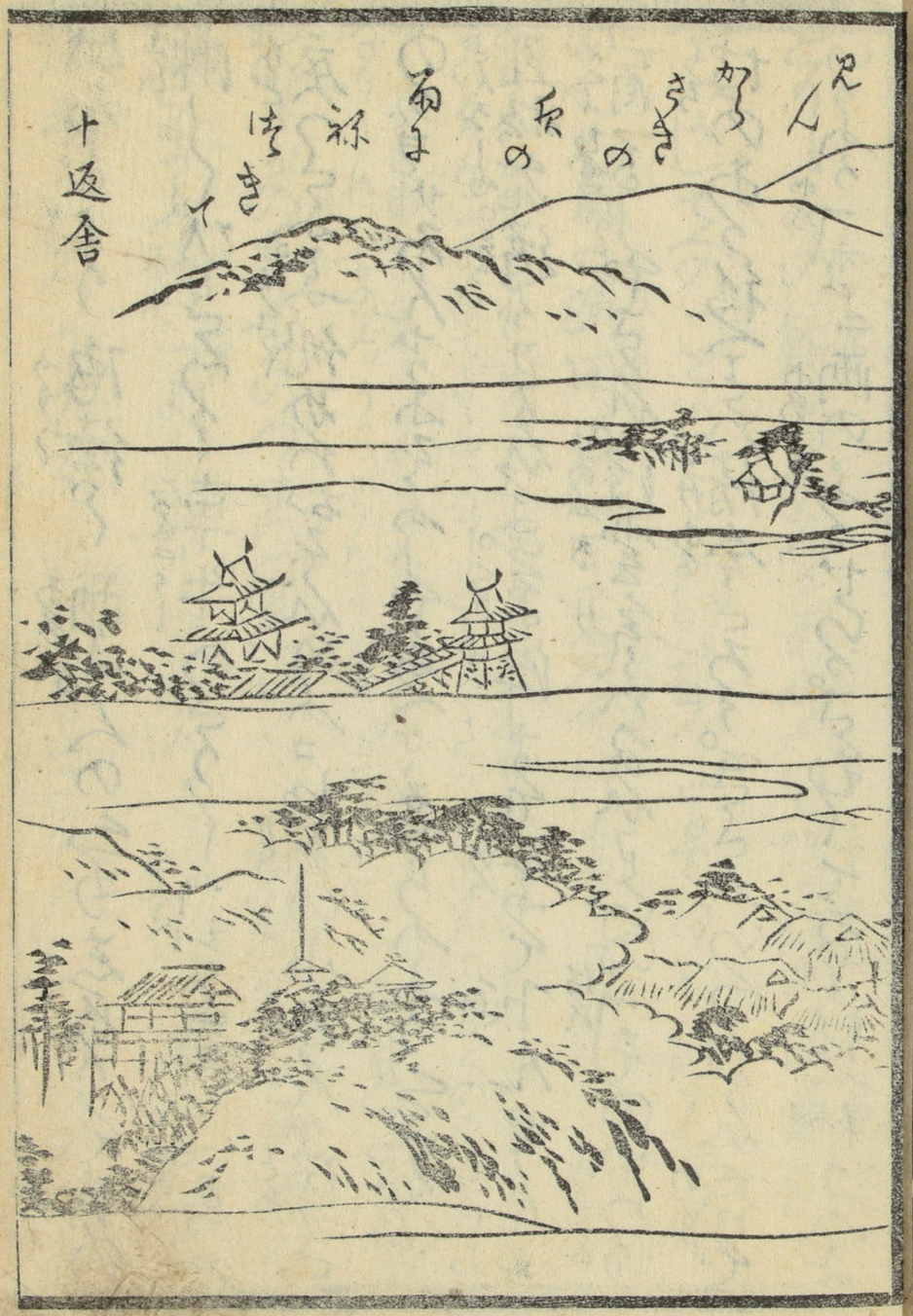
月の

菊よ

祢祢

はき

十返舎



ひとりごとより俗續く兩ぶんの品もあるうてものの
淋しくぴきつるく車牛のるうく「ヒッチヨク」馬ハ
戻つてふち能めいおそんのコレ冥の小さんが間さ
のうぎサるんやふそのぐやあくあらかあうさるぷチト
目れ名通ぐるんよ。ふ津さそのてぐんぜんう。
肩るぐやさん。浮雲気いるんうの「そのかうう
ばのあう移くえ清今ごろうぷさハぷつぷん呑で
いうふう「ホン」二兩のふるせうぷさむくてるう移くむうふる

とうさその鮭がうんえるぷおんつと焼おて。焼酒で
やらしてえの「焼」とんざえ紙いの男ぶ。ぷうら江戸うで
あてえあさ踊用めうさよ奪て焼ある。ものうトりあつそ。
ありあまるるどぶうるんぷ。ぷ一踊用あもあくぶ。ぷちくさまぐの
さいるんよあひて。ぷ文るくとうりくるえあまどあ。んのるさみよ
やうくとおてえあくうぐのあころさひくく「そまでうら
るうりうれがおのぐうらげんぷきあくぶうりえて
むいうぐのまふとうるえ「とまでうトあまざみやへえる「とのつまう
むさまうく移く「焼」よくあうあえの「あまざみやの「アイサ」とうく
瑞義がむうつのうんの「焼」あまさけいうぷんいうら

まあ七ツ八文ぢやうんの「いつぺんうんるせへぺ八
ぺめへとぺすぐづのまあ「おそれるとそれいあぺおいらァ
いやぢぺおめへひとりでやらかるせへ「それいあるがてへの
トあまさりちやうんをあやうの「ゴリヤおつてうでうめへく。
ぺよかくてのそるがら「
ぺよとろさんぺおめへの所へ小ぢんまりとぺのろくい
番頭ぢぺあそこよあるわおめへの所の子供ぢぺ「アイ
ぺこの孫どもぢやうんる「おめへ息子とのがあるやきろ
ぺこうぢやぺ孫ぢあるさうんむとともあるぢやあろぢぺんる
「ソリヤ死めがちわくてぺおめへ大体のエぢやあるめへ。
ぺはこうくよこうしてぺ月よいうんぢ入やと「アイぢでも。
三接ぬと四接ぬふてうぺ喰やせんこうんる「そこの
ぢろうぺこの地代いうぺ出やと「アイ年貢ぢ一年よ
「百月ぺうぢ「ソリヤアぢ「ぢ「ぢ句ぢひろ祝「イヤ盃と
「れ「ぺと二番ぢやうんる「そまこのあるりとさうのぢぢ。
番頭ぢぺこの二番まあ間違るく勘定ぢ出来やきろ
「アイ出来まきとも「合点ぢいつ祝ぺ万一帰ると

地ごそぐ承知う稀「小八」いくるんの世ごもるる稀く
ごそ紙ぷめくこの地ら〜ぐやアあるあくぷたつさ八文ろ
甘酒で。家内中の店おしろしやでさるとんやごん
りのぐザアいうふぐやア稀くう「陸」おそく〜たぐとも呑
くんがぐさうたうきあうて少ぶつう稀くぷうさんいうぷく
くんるのせく「陸」アイきうう「てもよんいる「陸」ドレくいく
たぐごぐきうさ八ゆめくゆ呑稀くうぷザアいきゆ せう
「コレナ」甘酒の「陸」ぜが きうう文ぷうんるいる「陸」きう文八ゆの

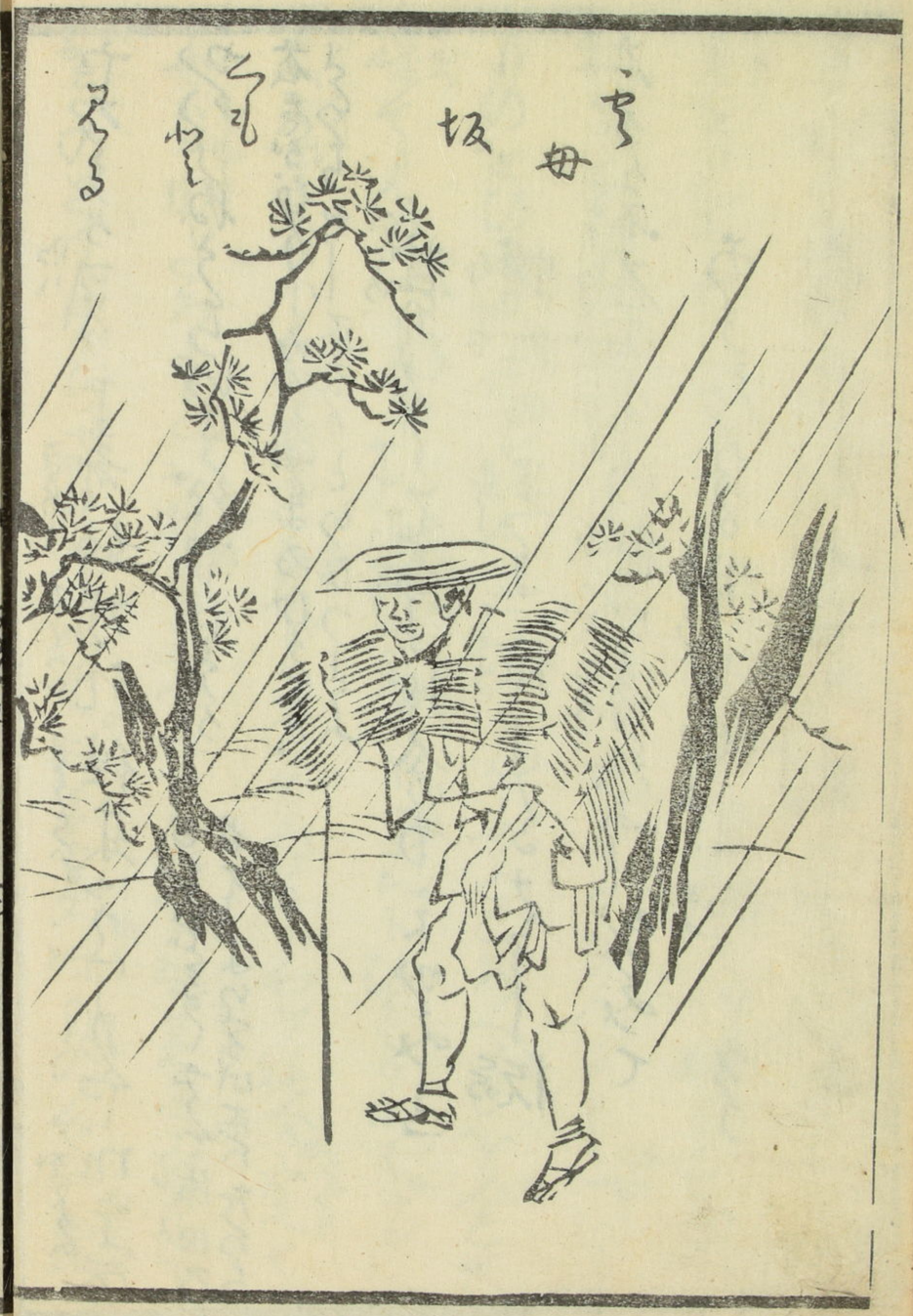
しごぐこの代ふさ〜引く〜「陸」ハアそふんるぷよふごぐうり
ふうさトごを注出て大津のちちを行きぐさるよ湖あちんく
ごごトて八紙ひと目ふうんるるけいきよく〜ぷうさるる云陸
ふんのぐ

風のゆてかるしさる琵琶の湖
さうま八京の外の一義

かくて提所の口城下を行るる時ゆ十二三案だうの
案り強ぷ犬とけうるけるのぐらかけ出そもくひゆうう。
仏のゆう紙ふ包ごーりの紙ぷうちとうるふカうりしと

ゐるもとちひさべぶ法師をうつて拾ひとり。孫
さえをんまつ〜だちちちふうこうと笑ひて。婆とこうく
稲ぢこもりぶぶ八ちゃとんうけて少ヤあんぐ〜いく
ものをひろうさゴレそうとおのうがみとこうく。母を食て
探そんや小トレ〜ヤア小判ぐ〜ぶく〜ヨルトひそうみ。ナルト
天五さ多ハうぶど寿ぐきしてゐるぐヤア稲ぶ。宝て
ふ自由ごろ〜とい拔るさうさものと。宝見さるも
おきのそ〜ごろぶさ死くいろて。何で天味ものぐ一盃

やろうろ一ツリヤ寿妙頂礼往来ぶ。ものや出さの
かう〜ねうちぶそだや せうトあくわどうく。ぐて係田乃
義たぶむう〜みうさまのむうそを。
とうぐせ〜ぶるりとひつ〜ろ。
其むう〜ぐそ紙今もこかみ山
蜃虹の星よ 細さるそ〜拔
たるうふ石山寺の観世音紙ふ〜おぐみて
あうたうる佛の利生仰ぐうう
さくもおみそのの要い〜山


京
毋
坂

佛
土
午
舍
半
九

浅田の町の友例よ。茶屋酒をのくで。吸ところ
女の数々あること云おそうな。おそうなさん
うのよ。名物の切汁よ。鱧のはけ。紙のおそ身も
ごぞうちんぽ。おもしろ。なるく。ほんさん今のを長で
変くう稼くう。うるれとちゃんもう。アイ。ちんなせと
らやあるちゃあの女。ごうんおひとでごさうちを。酒あと
あぐうるさんうるさけも食べ。級も春せう。
あんでもうるだをあくさけ出るせんぞ。外あ

何のある。女。きぐを汁よ。ゆ絵とうさ菓のおひと。
宮治革の賛メも。ぐうちあ汁。ほんでもいくら。
酒をあ。出くそんるせ。ト。ぼちぼちうさうるホ
ドレんぐめゆう。さけのるくい酒ぐ。この切ぐ
ぐうそれふうふく。ぐ。くうんぐぐ。あく貝ぐち
かぐうてあるぐゃア稼くう。ホンニそあぐうけ。はよふハ
さそふう。ぐコレあのさんはあぐくんなぐくたぐの
敬でるけまぐのあん葉の虫とさそある。ウ。あ稼

さんぴゃくこくせいふ拾こまこと屠ざる薩町形道乃
外科医者ゑんせてら。おくゝゝ乃で膏薬が張ふこと
とぴでと紙いぢごろふ〻へこまいう紙ぶ。きせ形を
ひとれて来やァきあくゝぴ乃ひてきちてこきやまを
りのゞゼト此内いろくゝさるゐりでめゝゆゐ番〻サァとまで
さゝくゝてらこそうらんでまちひ
ちちとだろう人間のやうな乱りらふ乃つさ〻ほうひくら。
此亭ちてさんおせとるのぐらぴ。さ見て紙ち智て動宣
まくてくんるの乱人トぐんのひろくゝるもとぐんぶまくさゝひぶ
せだぴくゝゐもたくうくてくけとろひとき

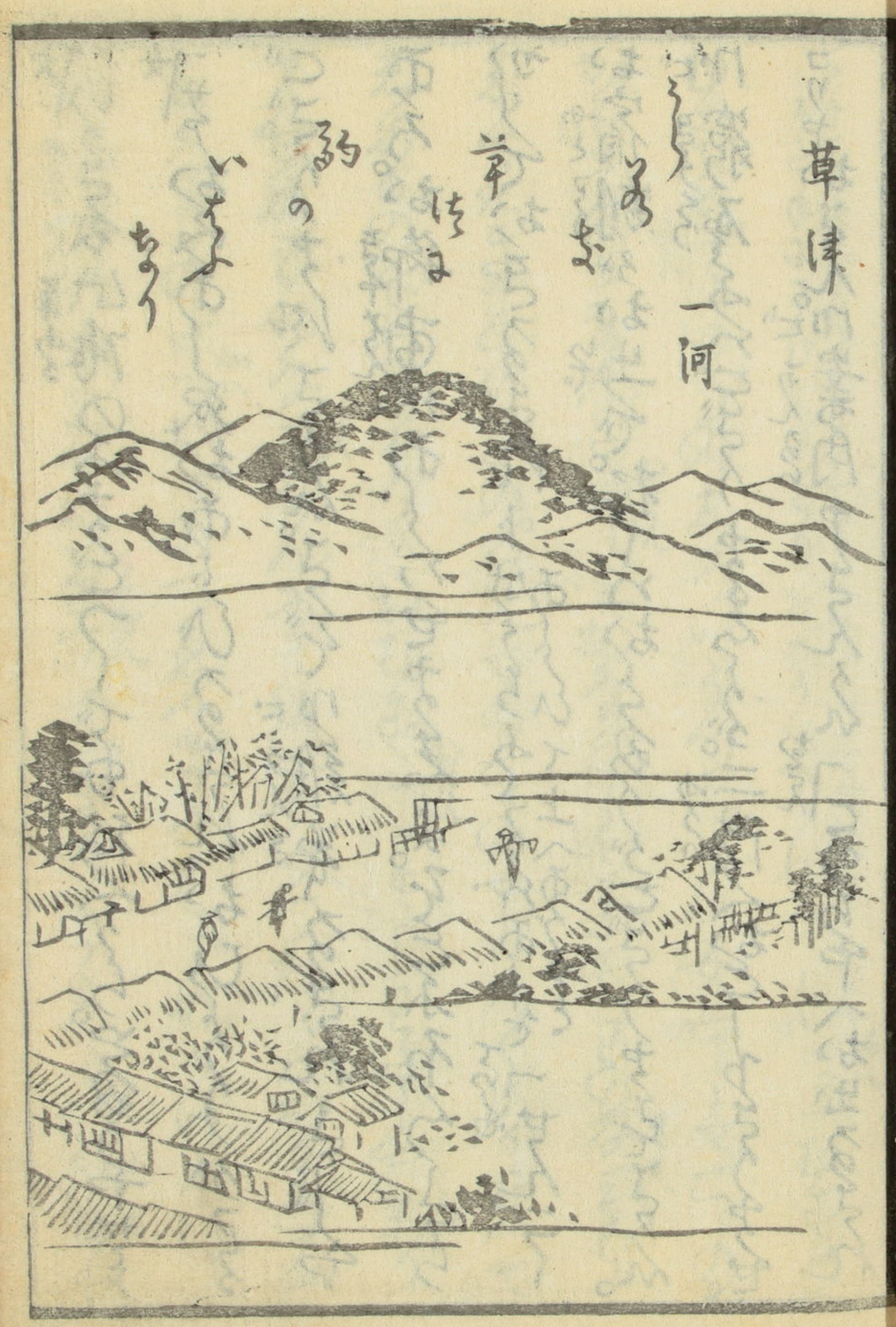
ふそ〻ァるのくゝドや。漆田村雀屋太兵衛悴太五ゴヤ
ヨゝがとこのちちさあが逃子れゞドやふゝ〻あゝぐふ
ぐぐうまくとぴされ不ど子供ゑらいひつけまして。猪而
の町の勝屋ちらぴとうそうくうりがけぷゝイおとゝくと
ナやりくぶぴあるのくぐこが拾ひるのされてやされ
ふくこちの仕合ぴおくてゞけるのゞぐりまくとト
ゆきくゝゐのぐのそうちぶ〻ナニそれ逃子れゝドレんせ
てうぷゝきゐをつゞ〻
るせくトゆとうてくるふ〻ドヤァこうくんぐこと
ちがひるゝ

「ぜんごろて」稲ゝ者ゝ
あかせる。小ハぜ。ゝ
ゝゝゝ。ゝ中をあゝゝあて。ん
いゝ。「いあく」ゆうんぱてい
だ。「稲」ゝ。百七十文でごりゝて
稲ゝトぜゝゝぜとをいひ
てをゝちらげるぶ
拾ひのせゝゝとて
ゝゝふゝゝひ子の

かゝて。酒いよゝ。「酒」ゝ。桐油とゝわし。
背ゝでもゝするだゝゝ。ぶ方ゝも。酒屋も。生べ
てゝぜゝゝ。「米」の。「姥」が。「酒屋」あぞいゝゝけん
「おゝ」ゝゝるゝん。名ゝのゝぞゝちあぐゝん
ゝゝ。「陰」いあくゝゝぱ。あゝいゝゝあげるゝゝ
「根」ゝてゝのゝゝゝちゝふゝゝゝぱゝん。生よ
ゝゝゝゝ。止ゝゝよゝん。あゝゝゝぞゝゝゝゝゝゝ
ゝてゝゝゝゝゝん。「ぱ」ぞゝ中の。酒。「酒」へ

大ゐ。中山屋のら宇山多茅の砂川も安村も。
生ん那とまうまうさろん。南宿へもまうるさろ
まうせ。ヤア川がとまうろさとろへゾリヤアそんざだん
ろうとせさ。ア方かい駕やさへさへとやまた。
とふぞ。お宿をお那ひやまた。小八ちろア。宮宿
がありまた。さよぐもどざりまたようぶ。そうちやへ
お出なされても。川よでおさ。合がどざりまた
さろんとさろろ。隨ろ素鑞でおさども安いさ

まるよ。ゆのどやあろとあるとなされて。宿を
どうぶどさうへぶ。お茶よ入まるさらお那ひやまた
あるくそよいよるら。マアこんてうらのさふまやせう
トやどりをさるよたくもくるどるさろのまろくを
ろうばまるとろのうどやといるいくのおさいろて
ろまそどざりまたザアおさろうるさろませ
ナエトふたさん。家素鑞へどろてたどざぶ。おさまら
移人内どのイヤあるさ方かおろくさろさるへさろさ
ふろうづまさ。さよるらどんぶんおさるろまた。



ばかりこゝろハ五十や百のお客がいろ〳〵きそとさうん
ゆ　イヤおあくそいろてもナアほほさんがらうさう出入ハ
生為行くぜつハテ口らゝぐるそとりぷんせうらると
玄冥うらうるとぷ徐ふぷ生遠入ハ生来ハに
うらうるト内ちぶうんのもみしきさふのの女　三ヨナそるの
ぷ思案るさぶどところくるとまうでるんういる
トひきぐりこなれて　陳　一つうちのぐふでもいうけまどゆきよ
うるらふるのこからちあきうとあるうれトまさわハうてき
うてい川こむ

いろさま仏様のおまごつくでも神へくらっそまうやせう
女サアあみあ〜沢もあふひろのされ。もひろうがろる
ござりまはさろんさでゆ御義なのされさどや
あろ。お御まいあ〜ろのせやまろよ。そとふろつ〜ろ
ろ〜ておいさろのされトけうちふろうのあーを「せんて
お宿割がお出でゆくいあとろあうござりまとさろん。
ゆ窮屈ろふんござりまろ〜ろ。二階へもとーちさろませ。
こりやおさんゆ案内やさんろん「ろちやへお出ろのされ

トナニ長キ女ガ長ドンノ長ドンノ長ドンノ

遅く付くらござりまそ。明日へぐらゆらお天気で
ござりまそよ。まづ川かとの外の大あぐく
ござりまたさらん。明後日あるくでハあるまい。
さんらお明日ハ矢芝の鶴渡ハ帳ぬ参れで。
ちとこいらいづまと世話やよまつりまそさい。
お日和あるらハ糸清るされ。お借いこまそよ
らるる。そたいどあそ糸くやせ。サアあふろく
おめーるさまと。トうそくあるくもモおぬるうん
ござりませんうるる。アイイお邪ゑあぐらとと
樊てくんるせへ。ハイかとまりまくト。あるの下を
コリヤ。ありがてへまくおめへのゆうるくくい
へふぷろくそりらて入くらぷぷぷとろ
そうへたんまぐるごろう。ヨホくおらくしさる
おつまあるるるる。イヤおあらくで神へぷんとの
るのさ。今青とふとまつくも牛の縁とゆら。
おへどあそくそくまるる糸へ神へうトいちやつきうちう

ちうもの「おつめやくさんあるまさんセト」よびたてゝばかりの
方をきゝあふうけてたゝりもくぼ〳〵ときゝうはゝ
うびさとゞおとうらぞゝくしそ湯ゝあるゝ。ニゝんのどうそ
ん入ゝ移くゝ「小」今ゝ日あゝづあふいゝそ吹てゐさゝ。おめく
ゐのぐゝぷゝの女めといちやゝ法いてゐるゝ「小」そでゝでも
その亭主めぐゝ法まゝんでは「小」けゝうるゝゝぐゝ業さゝる
「小」そゝよさゝ今ゝ小ちんゝあめゝが来さゝらさいさゝらゝぐゝあ
女房ゝがゝるんゝそゝうぐゝぷゝ。あゝんでもさゝあゝりめゝを。
おとゝるゝてゐるゝふ遠ひゝ移くゝと来さゝ時ゝ自服で

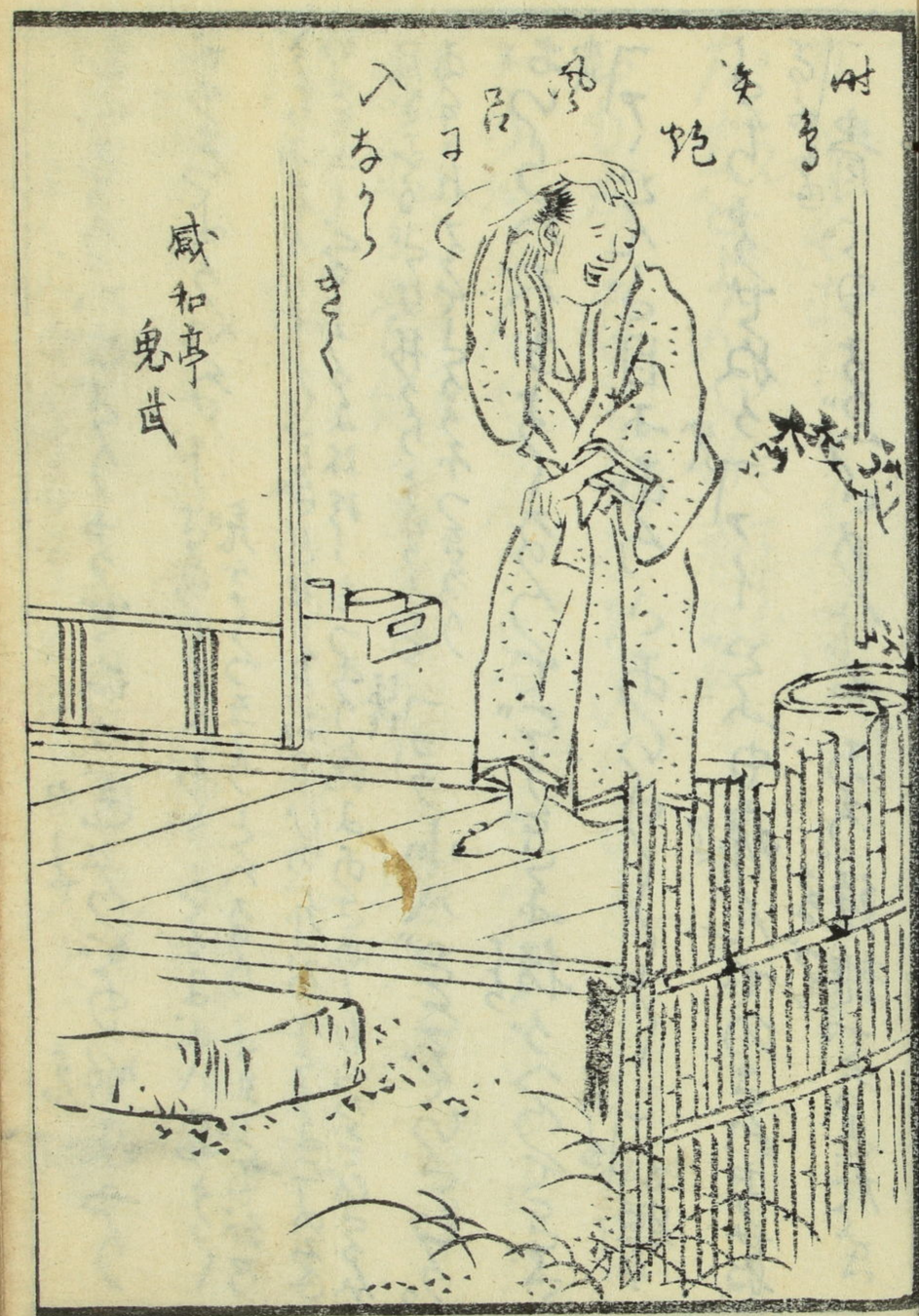
おゐさ「法」ゝうちゝあゝてゐゝうゝし。今ゝふおいゝうゝがゝやぐゝた
ゐふ鼻をあゝせてゝんせゝやゝうゝらゝぷゝマア湯ゝふ入ゝく
来さゝうゝト「仕門をさゝ八ゐゐふ入ゝ手ひ。法ゐ出てさゝければ。
ほゝゝゝハトへゝふゝあゝふゐくゝとゝがいの女さゝうゝて
とゝを「小」コウ女中。ナレトおめくふさゝるゝがあゝるゝが。後ふ
そゝうゝと来てゝさ移くゝ「女」ヲホ〳〵おありゝがゝふぐゝう
ゐゝて「小」イヤゝぐゝあゝうゝんぐゝやァ移くゝぷゝんゝさゝうゝう
「女」ゝゝゝの形ゝ旦那さんゝがゝゆゝう来さゝてゝそゝるゝんな
るゝんでけんゝうゝんゝる「小」ハテゝそれでゝうゝあゝさゝぷゝおめく見形と

ゑるのだろう。コノ畜生めトおもはれつゝあると女房コウ
旦那がやうすをくいくとぞあるぞ。おゝさへ矣乾乃
八まんとゆらく旦那がおいとをつまとていふといふと
うらぞそでワうちが病をおこしてぼまこの男
だろう旦那と一所よあうそまうそぴとう脇ふ
殆めうらぞその時そうとまるの合れ出来めへう稼
ヲ、おうゝやのアイヤサヨとひどやア稼へ兼知うく
アレサマアおまるのまるまれでいくト仕門そのまも

おだをコリヤくおつめ分のをしてゐるぞおとこのぐさぐ
あうちやへいうんうん然ハあるさりのお様ぞ昨日八
どふやら日暮りそふでござりまそ。八まんへお伝
いうまるよアイ法旦この男が是非乗りたがつて
ねまそうらコさよるうらマアおゆりとお休トのひ
ううそくおりそやく保ぶ仕門そうづうりどうそのまく
行ゝるがれうりとるおりをしてくうをるふいろの五
うらゆる必繁あるどおりひつさまそおまの八まんさんけいる。
そいゝものときくハだうりをやつりが分でもさくぴやくをおこして。
あとよのそうんとおりひづけてうちゝゝるが面の日のゝび
つれるやぶうりとやひとゝ移りおくるが新おきいぐく

とれどふぼくとぼくとをぶつけあひてたたかいをして
くらひしあいあさめーをこちらへてくるとぼくをとる
小八それとかくろのうどぶふくをていーもあるまさせぞの身
だうりあとるよのとるさんどんぞのぞーそさうふ人の目あるとろ
やうるぶどぐくひとあぐーくいのものぐとさまぶぐよくうぶじさんとと
ありひつさぶんでもこうのたーぐうぐとおちてけがをせー
てのくまのてるーおとるのとうんとてぶてもえふありーるう。
紙ぐどのふくろめうらぐどくとふさちぐーそうげおちくうしぐ。
ろんとくふこのあくうりを「少八」「あいくーくーく」「ヤアく」
えくくうくそくらんぐど
どふるのくれどごゴリヤくまぐぐろりてこいぬんぐあう
くるあう「女」「ハイりく」お彩くふえれうけまきよういるぷぷぷ
ぷぷぷく「ちも」「ヤイりく」おまぐ彩くふくのぐやるんぬん。

ぐくあだくけふきおんくまくさるぬぐどふぐあいる
トくくもこうくけあぐりてるれがぼくもくいやあるも
たくちくれくとぶとんまるくれくうるてある
どふぐるのくれまくくろぷくうちまくさるぬが階子くうら
おちるまくそ大強ぐくどぐくまくと「ナ」「怪我」
でもえあーくろトおどくろきるがくらどんでもぶれもせんぐど。
男どもがふくうくくぐきくはくとうれいぐくき。「くのわれまくくまくうくさ
ぐうくくとこうくんくつれくあぐるくと
めめのぐやぷおおくさるぬがおふくうるぐくらぷ体ぐやふ。
ぬくくくくもくうくぬぺぬまくうんくさるぬ所ぐくるいぷのんぐど


時
矢
蛇
雪
呂
ヨ
入なら
きく
感和亭
鬼武

ひく
拝ハ
身を
ぬき
ぬく

おこさるゝかどざるゝまゝせわ。医者でも唄よゆり
まゝをよるんるゝト さるめぐらいわらるゝよ。小八ハゆうく
長ぐたろうこゝろとへるゝりとさまでも公乃
うちふだるくしくゝどざとせーくとありひの外おんとうまこの事を
いつこゝ出しーるすーぐるよ様ばくもつくうゝ病よあさあーもらるぞひるん
目をるるぶけ。移くらうゝるぞ。小八ハどこでいこもゝ。
あゝるれたゝるるれつゝるゝ
おいらん大ぶよくるのうくそどうどざふ接ぐへうくさゝ
小八 アくとんど目ふあつさ。あいゝくくくくゝ お腰ぐ
こちらまゝせねゝ小八アイどぶも痛んでのさんちゝせね
小八 背でもまぐるゝんどゝあろ。強腿でるとたくさ

るゝどくくあげまゝまゝよゝうん 小八 イヤくさまくようゝう
さ 友殿をとゝんで。拵 療治紙くて苦ふぐいて 小八 人の
幼もまくぶどよ。薬だろういらぶどとゝふぞ医者
どの紙ようんでうんるのせ 小八 さよあゝさいゝるね
さんど 近ふよ骨 つぎ 繼ぐあるさうん ト医者をふる 小八 エ
ゝ 小八 ゝくくゝ目 め ふあるゝ 小八 おあくうゝう。おいらん
痛 さ んめ紙まるぶけうゝまゝ 小八 ト たぐひふむのゝ
いらどくくくらぶど公のうちふかぶ さんちぶひくくことを
ぐんうくくくゝふよくるゝもゝくくゝ仕合ぶきれくくくくるうち

下ようそうぐるのかしやさんびんろくじのぬのとよ（医者）「おやあさいぢ
おるまでとそうとさきとるかあろうべしくきくり
ぺぺどうとじゆんを（小八）「ハイヨろちでぐざりゆきて（医）「ちんどど
うらおちるきんとそうじゆが。先ん御紙んきまよ。
ヤアはいかむつうんぞくよおんせるきんべようんよ。はは
るうと。療治がいろうて面倒でぐざるきんの（小八）「イヤ
時とぶたのぞんこざりゆきぬ。たうさ今おちうさのぞ
ぐざりゆきと（医）「ハテそのおちぬさんおんせるきんべ
ようんよ（陪）「さあうくぺぺん体は男が来ぐきろぬちうの

くてとぐざりゆきと。おちるのちをとく蒲焼きをとろ
三つ。かさ待て参て茶でうてぞその上へおちうと。怪我い
ろうゆきとめくよ（小八）「イヤおまてうろぞその内がとろうん。
どどのくふうう。二階く階子段をけておくとうことが
あるものく（医）「必竟腰をうこれたまごがとそ。り
首の骨でも打おりてうんるきんん。たちちち命がるへよ。
死ぐざりめく療治をうちおまの所ヤを不。笑ふかちぐ仕合
とうるものぐや。ちろ〜色い骨のおまとのぐやさうん

骨継の療治いろ〳〵さまざまあるなか「骨のわれさ
のハあ方を継合せて合入まして。焼ゝゝつげ
やせうゝ「医そまゝハ焼継のてゝでゝゝ。漆戸おと
人間とハちがひまゝと「医アノ人の骨のまゝてのも
つげおるゝ様「医つげるとも〳〵「医ゝんゝゝゝふゝ。
合点ちがいゝ様へ「医ハテちゝん強接へ。継本をまゝと
おるゝゝと。柿の木の葉。梅でも柳でも切口を
合せてまゝうゝと者ゝゝゝとつげる

道理でゝゝる「医ハ〳〵継本をまゝるハ。手附候が
あゝて出来るもの。人の性質ハいゝるんゝゝき
者ゝゝゝ者是様へ「医めゝゝゝゝゝ。そのゝゝりゝゝハ
者ゝゝゝ者ゝゝ者ゝ「医そゝゝゝゝゝ

大福屋
本町二丁目
一九の口上

あつぷうとう はらハ ア さとの
かれば医者さまをつぎーて ぞうと
ほうそう おうけあうんとさとうぶハ
てがやうがつてまつさてあのべさま 祈人ゴウ
ほうさんぞうさのぞ 扨角医者が来ふ。
おめいらざるとぞ 祈人ゴウ
うらつまう 祈人トハ内そうけまつ モうなつちんが。
医者どのかてうて 道まうぶさんとうね
今来ぬる法市がうえ まうぞまハ加持

まてるをしてまうとうのてぞうまうぞるんよ
るさんまうぞんる下とのあぞそまハあうみやや
せう下さよるら 呉今トかうそちぶる 長ハ
下青方でぞうまう 腰がまうのうう
かぐんでのさまうせねぞのかぐぶのうぞぶ
るるまうよ祈 祈をあうまうとうすう。
その腰のかぐんの祈 祈アるをしまんぜまふ
トふうーれつまうこうの中 山伏と
ときんをかうらまうでれまーしまうそ

ナさそんぷよ祈のつ成まるあるよぷつーしぷえんい
布切七八すぢつくるよ濃ひぐ紙おてかーらふ
いてぐっ沈中の地ぢすよ依てさえんるうぷ又は殊お西ぞへ。
いらーとでいるよて布ーえせあてるらうたくう
買のさ曳ぷらとうのお西さとえくぷかるど
さとえ乙伏ぷひと形いのるものるらがるどろ
奇特のあるどぎぷ布ろぷんく小コリヤきあぐ。
かんさ痩ぷんくとのびてくるやうぐホンニ

実ちうとでまい直よるるぞ。ゾくあさとてぐ
佐下ぷうぷんく佐ぷそそぐく佐ぷぷうぷんく小ーエく
情あるんぷあんまりいのうぷきさぞそぷしろのるうへ
及て来さ佐コリヤるるぷどいのりさぞさのぐや佐ぷうく
ヒーの形力ハきさぞる。まうぷぷは変ハしろの
るうぷら形を返てそやりまるよぷろぷんく
佐そそぐく小ハアコレく。又いのりさぞて茶のるうへ
かぐんぐ佐下そんるら又まへのるうらぷろぷく。

「ソレ」りょうこいイヤまさしろくなかんつ。
「ハ」てそのふぶあんぞるぜんをてうさんぞうるさる
「法下」イヤいるのぞ「ハ」いのるもさまぐんお猿の茶番
をこんるやうよ。彩のろうかんぐりぷろくそらー
ろうぷどのさるのご奏をめが「法下」ナニまんさをえぷの
りふ彩猶ハまてゆらね。猶ふぜんト「きの者さも」きひてぐろく
でろえのひあうら二うんをおりると「コリ」ヤイ。ぞふるく
小ハうろうそうさるうよぷうまてう「法下」
「ハ」ハハ。こいうハるうくりうく「イヤ」法まふねく。

「モシ」ト「ハ」りけるうれをしてゆる「モシ」ハ今
ところへ女うけあげうて
川があれまてぷ状彩がとをうまうト「ハ」ちせる
いよく元をすこぶるよあんまえ絵ようせんでうらひ
るぞーてゆうくのうよてのいうもるをうかるぞる
ありけれバゆぐていそぎまうくう
この和とうちいでうんその日の九時ごろ
うさ亥のこの寿つくうく和尚よ
ぞうとおちくる彩ぞーぞうら
かく打奥ぞて安村川よいうう人をぷが空る水みて
舟ろうてるるゆ亥ぷ絵うちぷとうて鏡山の

建場を打たぞ。砂川ちくあらけ出べ「イヤ
むりふよ又川がえくるが。捨も行くへ分れ銭と
えくさべそれあてそ川銭が居ねくのさいらりい
えてまら行く「アレくい川下をえくがとろてる。
おいらもあそこ銭銭そのべやア行くう「そこさ
さうんとてア行くやらうーやせうト川上あそこれば。
男さうのを弟あそぐくさ行くさうえくさ川をちる
とうあらしが中あどくあくと扇のあうあそるよひう。
扇だうり出して「ヤアえくるようのさそあれば

らうぞそぐうふうらざアあるめくちとあやうり
このそうけざいらとみまうぐ行くぞ。裸よるうそさくや
とう行ぐ。裸よるうそさくやせうト少そのまま帝を
あれが砂行帝もそのとうあさ。
あそうの上へさうあが川くさうて川上のうさをえくまが大
ぜいのあの川でのうさうまのそうとさそとそ高
みそ川のそがらうもとちがひうるやとあくどそのでんるくて。
砂行うそ穴ひとうり行そもくめ「コトヤとうぶ
川下へさがうまるう川さそのそあうもるそうえ帝
るぐ。あうちが往来の銭場とえくるが。扇車で
そそうあそんるふあくい行くとえくるぞ。ぞ」て

をとる遠てやちぐ。おくよりてうかんてのぐ。サア
さんく〜トのぐらてぐんぐと川中へ引うかるはさのこの川れ
ゆうく〜ゆうく〜とひざのあたりまであるこれ
るふ「小八」コリヤどうぐさんく引うてうと男がでとてらく
こるとこ。背ぶけでおくぐぶア、さもく〜とるゆら絵ト山内川上を
引るものども「ワイく〜孤おでも所まきてこてこう。
ひこてきてそ「小八」ヲ。ゆをぬるまゆ。アがるこてがうめらぶ
あるうよく〜
ト町ゆるぐらゆんゆ〜川をむうくとてるところひざのト
おでやうやくぬまてこてこれさもーがてくとゆるひ出し。
きものをきるゆるらさんくとしてるうの紙ゆれば「小八」
ゆよト弦をたきてだらひづゆ〜ぬざうゆうゆ

ゆんきうしさんくとうもあうこ。背ぶけ
きてきうこも道理おのとうゆ居きでおうこん
「小八」ホこ三のおそのとんちゆこぶおんうが陳ぶこ。
ちいうをとんご目よあうもあうこハ〜〜
せぶきとるん居ざうとまうでこうゆ川
ゆをよきてきうぬのんあらゆる

續膝栗毛三編上巻終

岐蘇街道續膝栗毛三編下卷

東都　十返舍一九著

早稲田大学図書館

かくて守山武佐をうちすぎて。相の宿清水ぢやを抜
といふところよりしばらくさんや日暮て。ひろ沢堂東
るの。殊ほ夏中労ましければ。お熱の宿をもとぶ称て。
一夜の疲をむさぼらんと。夜かとりとえんあるくあ。
草鞋を脊負て戻る男。あとをゑん身てコリヤ
おまんぐ。さありしやるいん一い宿ぐあらべ

嘘乃
谷
ひろ
あ
や
花
うた
樹
伝兼
百堂

ほそ
いつ
の
青
堂
鶴車

世
の
杜
青梁

さまうてん　男　こりゃあの　あく　やどや　ろいやどぢやてく。
たけがまてありよるぞいちのうちくさまうんせ
小　るのんごろけのかごうせくまくるびまさぼほさんどこ
でもいだぐ　いちや　一夜のことごろうらぢあくとまつて　ゆくまの
どやア　ゆくうら　隣　そんなのらもをおめくの　赤い　男　ママアこちら
まうさんせトつれてゆくんまあくこうれのいろふもむさこうこれ
小家　あくくこ　云アぢゆんれいるどのきちん
やど　隣　おとるうりうん　一　ちゃ　サクくあごらんせく　隣　こりつれ
大　ちん　変なうちごせめてたが　女　でもぞのぐあまびらぶ

トうんるる女がうの髪の毛ものあぐけしてうもかぶもかぶれ
ちうちそうとまこるのうまちのそ子とたぐまつけそうろうの火を
ときるのぐらたる　小　コリヤ　おくふ　ゆくうん　隣　ゆくうれ　モをいれめ　ゾウスイ
るのと　焚　うん。たぐ　おまんぐこうひこあこ米がある
るうめ　焚　せるのきん　隣　ナニ　苦　うこ米がるるのう。
おいくこと　こ　食　ごこと　ちりのこ　こ　ふぐ　ハア　沸　ねこぐや
るのうい。ぞいまうこう。そこ　こ　たこぐそとまうらん
ちう　隣　まこ　こうすさ。ぞこどう　こ　ふぐうん。
まうこるのあげるのめぐるんぞコリヤ　おくこぐそうのん　カゼキ

燒干がするぞやろ。琉球芋をとと入れて焚んぞ
「サアく」おろさるいろうの祝きへほうとよんを
あづかるされ「ちもちいかさ」箱ばかるひらへぞるいふ
ちゑこされさるのりてぶやあぞてや投糸の枝のり
うとおりのさ。堪忍るされいめくきいとさいふぞうふ
ろちらがとんるふうをてねとれがとそ。悔がまん。
モシお邪ケるのぐら聖の飯まで芝をあづろてえる
芝トうねてはけうがぞぞぞ人をゆうとおのいうひうげんの
不ろろをひろいてぐるくと紙おつえぞとんせてうちがくろ

中へ入おきさるとろいぐくてゆけまのうとんてそられくを
おうきくおりひるとんせてきもとうがさせんとうちがくのまくひ美
むとびてぐるくゆえうとそんぐ。「ヤアくおろ祝ぐやなぞんる
ぞうてびつろうくし
りのぞくどもがあづろうてへ。夜がよん。ぴとん
祝ろ美ぞん。ゴリヤおろいがこのろうおれなられ
「祝仁ヤ旅でへ合祝りろて祝るへ。芝用ぞがろう。
おどあづ
箱へ祝けておくがいくとんがいひ芝ろう。おめくろ
ろうへ蛇てくんる芝へ「ほ」それい遅惑ぞやぞんモシ
ろうおようん。麦の釣仏擅の中へいまて垂ろろよ。

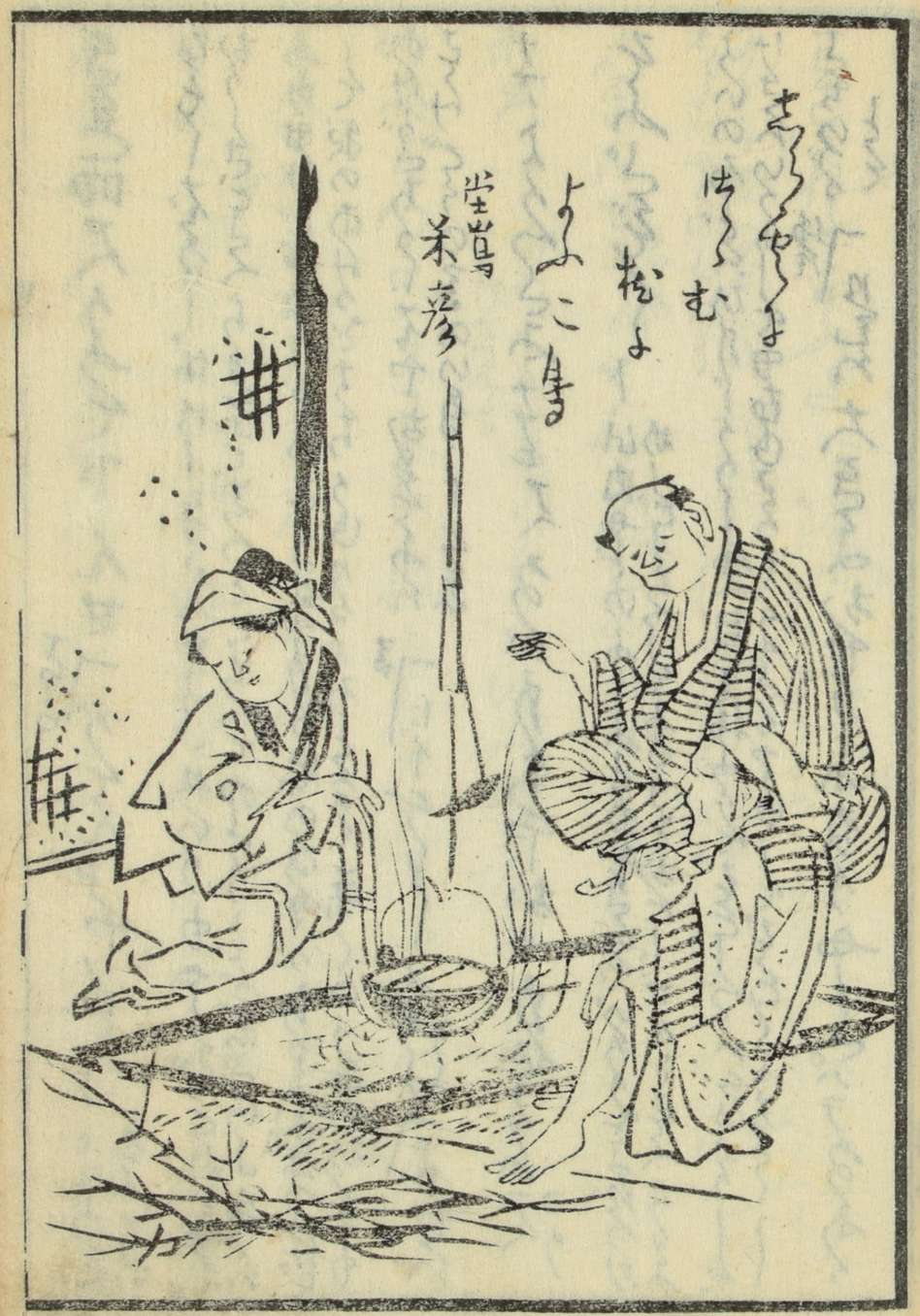
コレさんるさんたくさんおとをあていうんせ。
るいぶぶんやみくトつくぶぶんのあまーをあけく。
入まておく爪を洗ふくよんせて入れ
おーけやどれざーれるもぶのあらの爪あの中ぶぶうのところいさ
ひとるおいのまとのあのりるあーやぶまーやぶまーどをとふーてかひとさん。
ぶるくーさるやき。飯食のーくらくさるとて煮のさるもるのべひとん。
やうくのるるあて出来サアあくさ猫ぶてせんうん。めー様が
あぶりーとうんくさ
ひとうるいさうん。コノ猫の様なとおらみてあ絵うひ
るんでもるいうん。ぱうめーめらうひ。ソりや
ふとところのかりるめぶ。小便まるるるるぶ。汁の中へ

ちとくあるるん。モもその小便のおらさ
汁へのるんぶる。イヤかきうんさぶふぶそうとこうやの
ちうをるんてあげようん。サアくあるりあるさ
あぶりるさん。トかるくるくさぶんとうまが。をけうくうくー
ぶげるるんへぶるるのるんけいのかくぶんまぶんもうみてあちの
あるうん大きるるあるぶて
まるるも。ぶの生うらの約束ごとであらうあるぶ行く
トひぶるんとるるのあぶいるのるーとあるるるてぶうんのめーのまんるるろ
あぶるうるとるうとでるひるるるる

茗荷の外ニ何もあるやせんゝこん茗荷の
ゑんあでゝどうもけこーの所のうらあんだゆうでけさ
初あじやさうんゝ紀元よ えんさのじやうん べいくよ
名おごとうてゝゝゆうがだうゝこんまりぐおりめく
たてごいいくら紀元のさるこるもあげんさうんゝたごこん
百文十でゑんこいの 情 のつゝ そのうゝゝこうこふ
むこんうちじやけまとゝふとんハ移うら蛋のんのを
あげまゝよこん 小八 蛋ハ移ハが風がゝこんとねる

ごうゝ さうじやゝまゝゝゝんとあるこんの 陽 コリヤ
とんごめふあんゝそゝて風 風 ごうゝ移ハ あやハ
このさ移よあるこるぶりかまゝ あさじやあ移ハ ゝゝ
移ハゝゝたごとうゝあごうら湯もうゝ移ハで 陽 めハゝ
とまゝうゝというたごうでゝゝこんな雨ハとまうたゝぶ
移ハゝゝよゝよ 往生 して移ハてくまうゝト けんふうふけ
あごて移ござゝこんでゝそとゝまゝ ぜんとうこけ
るゝとうちさせてゝふうを移させゝふゝふのこんのつぎく
何のまるゝのるくゝのゝ
こうゝとうげるがら あの元ハこんふ移ハうこんさ

そふじや。おさとのおさのもゆうがだろうさうんせ。
ゆうじやあろうとこゆうがゆうとろうとのこうとこ
しるるげる。歌留多ふるゆうがろうて。仏壇乃金
ゴとうとんさとる法りうじや。ホシニあの金ゴとれて
りんざらゴーゴ中の袴うけてくごんせそれだろう
じや。ゆんぷらうさめゆ一ゆんさせてゆろうい
さらゴ。ゴろりうのだごさゆの卵百ゆ度さんせ麦一俵
買ふておこうん。ゴーのいりじゆもゴろうるゆ。紺の



さて四人うつて下んせ　「なる」ぐそんぐやく　トうつうちに
あんてのひとく〜だるま・ほけく〜さく〜八かさこれのうつ中やぐどこれを吹て
おう〜さこ〜くら自ぐどぐろこてのうつしがぐどのよ夜れ
ふけおけどぐれ戸のさきまのる風のひゆうるるふ蒙つねど
して我のあけるをちちうるぐ寄くのうゆのひぐさも
あけぐちく〜たやおうてあれ　「ヒイこく〜」　人そこのうこの「よ」せべ
こけぐうのるのいるく〜ちゑ
ナアうつうこさナアこアへるぐがりちやおうあんナアこアへ　ヨウ
そふぐどく〜ト山内ぐどのあそふとあおきのでいろうを表つけ
めぐどうてあうをおとぐぜんとさくるるふ
ういのあどひりぐうう〜受目と移ぐりてをてづれこひうしが
けさいうあうあうあ

ようなものだらうがあるうでもあるこ

宿賃と云まして来る人物の

算かゝる極の仕合

そまより三ッまで三郎右衛門を打る。堂紅川乃

郎よりるゞ古屋くたびれよう。年の比六十

あまりの婆化。近辺のものとゝんで。彼の丁稚

ゝ絞ればみをもそ。その身わたゝち屋

そまうあそおるるりさるよりてゆくとそ。

あるんがさもあるどゞやな「さあうさ」あるこ

るいとゝやげる。こゝどものうらうそなあるどへ

んまあそゝやが。何ゞやゝとゝあ

とゝゞやそゝる「イヤもう土一斗金一斗」とゝ平で。

小判小粒がそんな。大ゝ

「ハテそゝうゝ。誰もそれひゝやせんんな「十二貫金」な

ま合。お宝人銭とゝゝで。什のさゝ絶員を

ゝうつけゝものゝそのゝ金をそゝそひゝひる

あるくのさ、そこらこも。一荷拾つて来て畑の
毎ゝふるとまるんりのじや、そんるこつちやアねへ。
ありへぐるまんせてこいかぢ。苦茶といふあぶぞんでも
一日ゴ千あづ蔓とりのあぶごら。繁昌あぶ祢
膨リリヤ肝がつぶまるとそじやるん、そふさあめへ
ぐるのもうる。田舎のものがえると。拝をつぶそふ
ようで。き吉ゑよかいろでも人と十人いきを
踏つぶまれるものがぞ。どゝくそのやをを第ぐ

生き女郎のゆるぶぶの紙、ハアまんぐ、ぶるい
ゆんくいな、ナアこどこのそやうまんぐ女をを書る
ものぐ、イヤそまでの。上方でこのふるあるん。
まんぐ女ゝくそぶんまの石仏抱て寝さやうで
あるこるん、ツリヤあへふれるものぐ、イヤあれ
せん。まるるるい天元の日であるこ、ハ二孤の嫁入
じやアあるへ〜〜ト此さ寄りの門づら町と打る。言安川よりかるる時。十四五
才の小地乗小でとぐめて、ハ子ゴるん言安の恵びさやでござり

まことに名物の言葉嘘さらし布新たに用るゝ
ヲーのことで買めてやさうりませ。隨分あつまるよう致て
あげまするよ「イヤそんなものハ入やせぬ」「お買
るのされどとよどざりまさてマアあとてうけるされて。
お菜でもあげるさん「アイ柔もあさら春で
あるやうさ「さようどやあるがマアく休んでおせなされ。
サア是でどざりまさて「イヤもう金が残へくら
たでまう行へぞんるもうちうちう賣てやり

たものゞ「ハアあるさらーをもつてうれる
「ようてゐまと。紫さらーとハさらーをハ
買もせどを名和の名のようなを
和をさらーてまとるうき 後
はれの弁をさて「コリヤでけ〳〵。もんぐされるく
をつれのもの
たるまるれどや。まとあとの菜やでいつぷくをて
いちのうん「ちうもも休んでいきやせ「トうちつれて
ちや食へたらると。おくのざきよ小ぞうひとりつれる
やどのもの「一人ゆをいるをうつはぞうとおとり

こりゃ　こんな　ちょい　裸の　家　言葉　さ　ぬ。けるい　ぬ　蹴　草　や。
イヤ　畑　村　の　俳　又　太　ぬ　の。ようぐ　ん　ぬ　コリヤ　ぬ　い
ぬ　で　さん　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　い　あげ　ま　ま　ぬ　ぬ　ま　い　ぬ　ま　ぬ。
ぐ　ま　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ

摺針峠

武蔵

浄瑠璃舎
竹亦

ざどやあるまいぞ。ごろのまに隠居して。是より後生
願ひつかまつるといふ身よりて。教生が好じやそうな。
こりゃまさうちやぞや。おまへ、生あるものの命を
とれば。地獄へ堕て。未来永劫不責を受ると
いふことちや。アヽおそろしゝ。ヲイさようなら。
教生はあまりよいこと。ホンニおめいの吸物は。皆どうぶ様。
おいしゝあれ。至膳汁をとさのゝ。その名ぶ。おめいの

まいものとアヽおそろしさの。仏法文のとき聞けと。
元遠をきゝまゝ。コリヤそのじや。ろ理なそ。
美味とおりのこと。ヤアおせうさ。どうあぐり
るまうまうこんハイ。亭うがりてこうせる
りのじやホンテそう聞ふ。そのきや尾があるく。
コリヤめづらしいこう聞じや。とおりひらつそんと
どうぶやうじやとハ。ぶつぶようひらりおるぞ。
りのこうぶてこうもりよ。一ぜんくてごんせ

うまんさぐーやーんな。コリヤあるさのぢとうら
ぢうておとーてーやあるさるの「ハア」さのみおとーて
ぐぢやうーん「イヤ」おせうさるへ。人よ教生ぢとるど。
今のされ吳ん いのさあるさぐぢやうぢうて。ぢ一
おとーてーとんぢうぢやいな「イヤ」りのまよてぐるん。
ありやうん悪侍教生ぐ大好物ぢうんせうの者
うらの茸汁で。小侍めとみう。殘汁をとうち
生ーて。泥の中うう飯や種をぢうさわぐぐ。

墓場の桶よてぐど三だんまぐ。ぢぐるうらの
内へ入てぢうてぢうさの「ぢでぐるるんの「ぢうるも
移へ。人を極楽へぢうちびくーあうぐぶ。それでん赤
一ぢあるよぢぐへあうぐちあるさるであうう「ぢ」その
ぢうんな。所で悪侍の親金ぢいちの檀方の中
でも。長右の右根切猪をて。死ぐれさんも
あるさうん。ぢうあの世で佛よるうてあるぐぢや
あう。悪侍ぢぐへあうちるぐぶ。その仏さのんで。

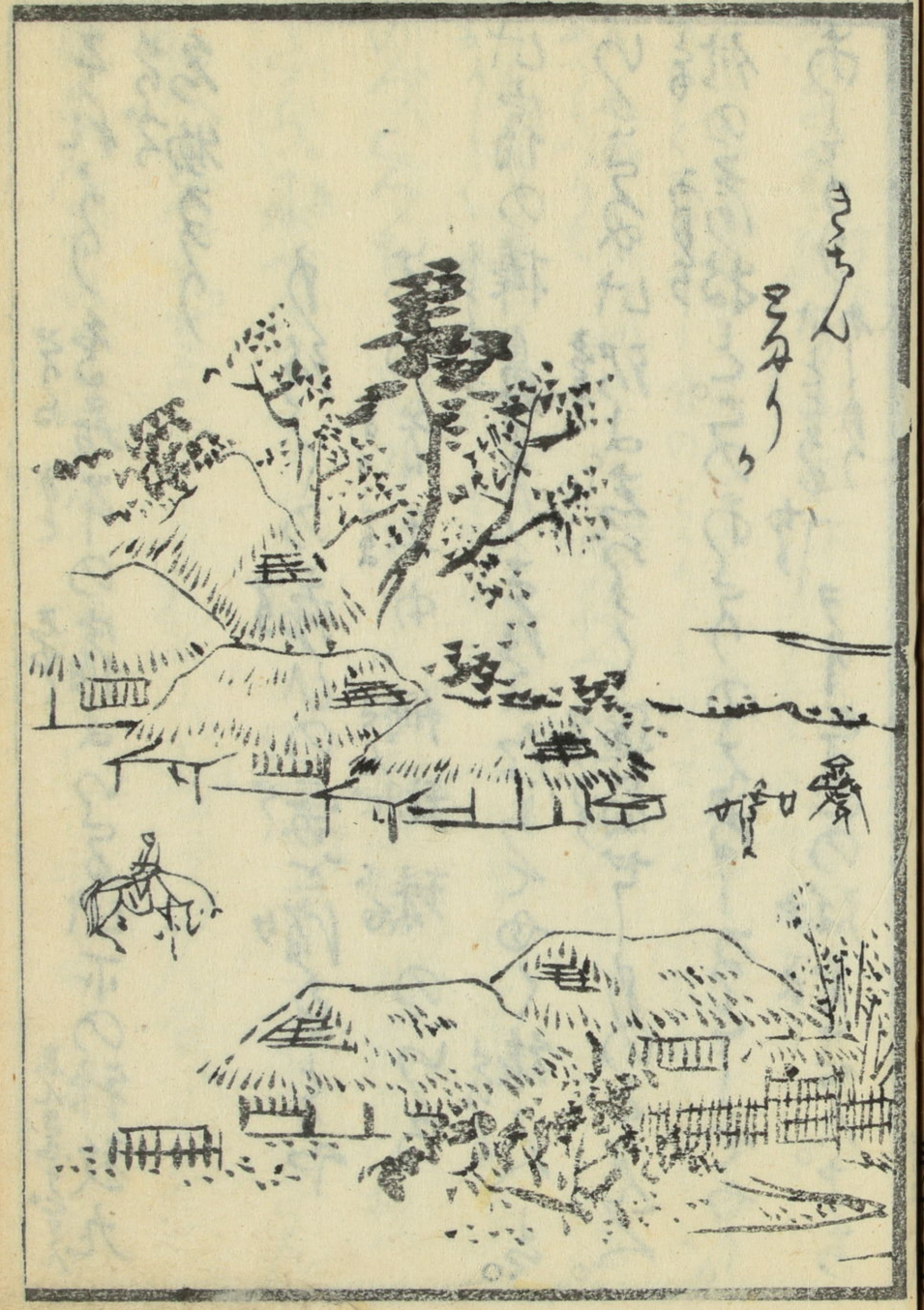
極方のちりげでつまるこしらえるものがあるぞや
あろうぞうとおもえばそれいるものが先刻ちらとんと
来ぶつるるんぶぞうぞ仕方なんこの吹筒ばかりこの
あなでこしらえるのこの。個一こまで買わるのうんな
イヤ先日の時年上京いらしゃはせ条の方名貴
んもでおあるしぶ。何のあるものもらぶあまり
下来でぞコリヤ吹筒あるらようなと。調てさ
らるのでぶりかまと。ソリヤ定て

そるのんふうはらら。墨塗みてあるてらんも
つけてあるさぶやあるの絵さるぶや。さるぶや。
ひらんさるまるさとしらんでどもいる
その吹筒の酒うんうんと呑よるぶアく
狗がむつつるぜでおざりやとハテそれい
乙家元の小役ちるものどや。アやとく
そらんん禁裏の仏葬送るどの節。堂上
方がそるのりさせる。完筒といのものそれぞや。

ようなぶるさがぶ急よみあはきとく
るくせらまくらぶそまくるのさるくりのじや江戸
でも青竹を火吹竹とわどるきつて大名元の
りさせらるるがあるぶそうり江戸でも完尾と
いつて小使るさくりのじやうんみ可そん
るのらは吹尾ぶくとん公家元の小使撫くぶ
サアく大変く使ぶそんざめふあいせるコレ
きさるへるぜぶ小使尾へ酒を入くふいらよ

のませくぶ。コリヤむ移ぶ。ゲエイく少きこねく
ゲエイく使コリヤきのどくじやがぶとしそんと。
そるんるこくとんまくぶじやふ不負さうんせ。
そのりうくちるのをくよ外の酒ふまるまりひ
ままくよトそりものよいひつけ。きくさみりるく
しぶせんくるるくぶごくたくぶくまるるあひこれ
みそやくたくをわてびくとまごびしはところを立いるとて
狗もるやるる犬元のくる小使と
うりてかるくるさんけるを吹尾

緑亭
可山
さくら子
笠をかぶりし
えの
さま
かなまくハ
かをかを
ゆめ


きちん
ちゃうり

それより香居本の宿よりいる山下の神教九
めつぎ名物ゐのり

ゆ行くの病ひの毒を消すとゝや
玉の赤玉中 珊瑚珠のいろ
山宿の棒鼻より。さるよたちてもく旅人も。
いりさるゑ山沢よ。まづ〳〵通面せりのとゝん。
彼の宿の名物とこのあるうのさるゝとてもく。
あるより 山とゝろの神教さんぢち

るさろ。彼るさろト物のびん人をおろけ来るさろしい。
るゝ〳〵そのまゝとゝんへどもまゝ山とゝろの女ゝもまゝ女ゝもまゝ。おそ。この子とゝゝ
のゝとてだるゝ合のゝろゝ中ゝ。ゝんざゝ。でもるゝ。ゝ。
ゝ人あとを〳〵ヤレハア来移人でも高い上よト山角ゝろゝ
ゝろゝて。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ

ハアてびくよ根性骨ノウぶちまけて。女房よまごい
ろるべんさうそぷ。勿体移くん。天照皇大神宮さま。ウ
強文よりゑこんぢりんどアくらぷんまうり
むげち移くてさアさうまあるめくナり〜あるよう
そんるふ素サアりむさうさア移くおれどアとうて
めんぢうのある男ぢアり。いげのとぢあうさア
とうそ。ぷのうるべんさアおりれ移くくらぷヤレさあ
注さア移くよ〜そんぢらハア伏見の山田ろう

ぢうう。ゑサア。沢ノウつけさうーあり〜川リヤさあ。
くるも夜遊のはきあんぢ。やあぢとあいそれ移く
くらぷ。二三度べもいうさアけまどぷおふハアこのち
いぢりんぢア。お天屋さ夜うけて。喰サアかくら移く
さうさよ〜そんぢらハアこうーあるもいめべんさア
ぢぢん移くぷあーさうんぢぢうさんるふハアこうたぢ
うんこんぢぷでうくおまんが可能るうさも。約束
ぢとぢんべんぷそんぢアうぷいふいぢあぢくと

ちつとあるアけ豆でゞ。今ア口ろれるとちりやア。必ずく
ざぐ〳〵アゞ。ア口ー大殘ノウ一本ほん生ーまるべいゞふ
いぢあち日逼笛ノウーしてろまさろせん「あ」ヤレたあ
そんぢアことといひのさる。けのいさろちいぎまんべの非
「ゆ」イシニヤ戻りるさろ「あ」ハテまさ来べんよ「女」来べん
そろそいづのちんぢアやらゞまぢでくろるべいまも
あんべんよ。戻りるさろ「ど」トそりつきてやろちよひろ
引たる「男」ヤレりあいくさろーありまー。小豆邪ゆぢん

るふ出逼笛ノウーしちやアあるろ稼くことよトあり邪
ちるーしてゆうんとちるを女とりつき他のろぎる。「ゆ」あぐく
アるゆうげけの茶ゆりつをりりさくろ。「ゆ」あぐく
といろつ茶ゆるうら。猪ゆふーるさろゞ口ー
ちの茶のをりつていぎまさべいトあげけのおヒ
あろのとりの茶のをがるぐと口ひろうろげ。「あ」アレコりヤ。
ちりをあろそさろくとりちゆくあぞ
まちるさろくトきゆあとをろうけあぐちあとがるふ。その
ちろうかとれをろんて魚をりよるわしそれちるどるくさりちう
そうげよいろうちやあを入てちの正のゆりろざとろりちよ
ちろとろやー目の下よ又ゆ「男」ある
あろうそのけーきよんんとれく
「男」さいろん糸ぐ

ゑとてぞんじくやくそろぐ

壹目鏡より中さらん摺針の

宛りやんる姫の系文

かくて眞紙ふるる。候をつけてあるうの相よ

ゑりはきんけるとその傳ゑ。おゑ毎の面の隠居しき

禪門体をねるぶ。是をゑんてアアあるうの

るでや。モを学ぶ殿るのぶら感ぶ。おりやのしぶ。

ゑゑのるるぶゑるちやのお人もどふるる

ハアイゑるちもひとゑるゆちるやせゑる

名おのさとゑるちゑ唐磯ふ

面元もるくてゑれゑとる姫

イヨでけゆ〜ゑコリヤ半ゑ方ゑるどの相の手

孫じや。ゑてゑとがお江戸のゑんじやる。狂名ゑるん

でやハゑるちゑ江戸の三陀羅の社中でぶんぶぶ

とやを半ハアゑ移てお名ゑぶ毎ちゑてゑとい

るゑぶぶんぶら生ゑぶ。ゑ是かくハアイ佳ゑの手

お近付で申様へうらぷコリヤアたゞめて居よかゝ
ゆえ〜〜さよどや　はよ日〜へぱさえの表坊ゞヤが。
ナシトあるいがゞ今夜へ日〜のうち〜とまらせあら。
日〜　犯の者へでけんが。茶が好ゞヤよ。淵桑なと
たてふまきやいまんよがゞでやく〜りりヤ
あゞてくぱぱさんゞそうさるぱいうさ表ぱせ日ふ
るゝヤせうう様〜そんへ孫をゞヤ。ザア　同表よ
いゞゞゞんトもあられてあさりが表をこんありせおんでも
そんぱのえれ。あれらして。ちそそよあいとめ

ゆるさん用　折つまてゞんゞの表ゆ〜おいうかのゆんきよの
ゆう〜ゆきこるる。拙本儀ともいふべきさいそうのうまおくの
ゞゞ〜きこのんあいせられて折をれが。女　これへふおとあり
下女ゞゞこゞん茶ゞどりちありて
るさんれゆ〜さ〜〜アイ　お世話でゞゞりゆゞはよ
小八ぱうちゞの。上座の客もあり。ゞゞくそそゞみ
蓮陰ゞゞぞ〜ぱ〜こんゞうちでゞゞゞゞ又船をうきさ
そふゞゞこゞゞゼー　内ゞゞゞゞの花をひん
りちきうー　ゞとうゞ　嵐のゆきとこんてひんのうき
十四五のゞゞ〜ゞゞんれうちのきちよ。拙ゞあのかよよゞゞ三ッ
りちゞ〜アイ　おきゆゞさゞゞよ。ぱ遅座でゞゞうせる

ざるくれ
手さりすき
歩多

かるで
さむさよ

孔雀
碧が井の
青
撫子
金九

じゃあるぷんまけえをめりひあるまーさ。仏射つよ
とまく入まさろせくてトさりませと八サアく大変な
ことをいひ出ーぷたうさたんなことであろうとろろさ
十二ノ巻くのことまさるものろ。おまぐまさん
たりとりけてうんせようぷ。どレくトたるをろてひろう
蟹のんさたよあく。モシ花鰹へトふあらざふ。
きらうとさる。ソリヤ根メみせる鰹じゃのの十三巻を根メと。
コリヤ鰹でこらくさかぶ。どうして根メよいのろ。

めのでパーいけるのじゃ移へたうふそれも。
その里のあらく花をさてりさせるのごろう
十四花まことをぷめくまそれをおそるめ。
モシその指揮をとくうんな。コリヤめづらんぷ。ある
ものどうんなりのん。彼前のまぐ十五それぐさろう
だりであぐぐふぷたんぷ移らとりみ陣じゃ
パたん移ぐるぐ朝鼻をいけるものぐたんね
門弟あさぐ仙弟とりふろ十六とと

いふる。今よりも際とゐんせやうト　やうくのことぶんやう
　　こゝ　　　

コリヤノ十松。アノいけうとぶんておけ。ぞうぶく
「はて」なにあるやおあさまいけさうせんさのじやゑ。
我侵がいけおうさのじや「はい」そよでや。是か
まうり。はよ伺のもりそうもせどでとがるいふ。
是のとこでけんる。田舎おうゑの田をおつしうて
おうてぶ。さんまねのとじや。乃孫者じやよ。お茶一ぃ
ぎんをこせませむろト 山内小石川 いんまうら町乃
新伺さゑがござうせんしうる「はい」イイくまぶふ是へ。

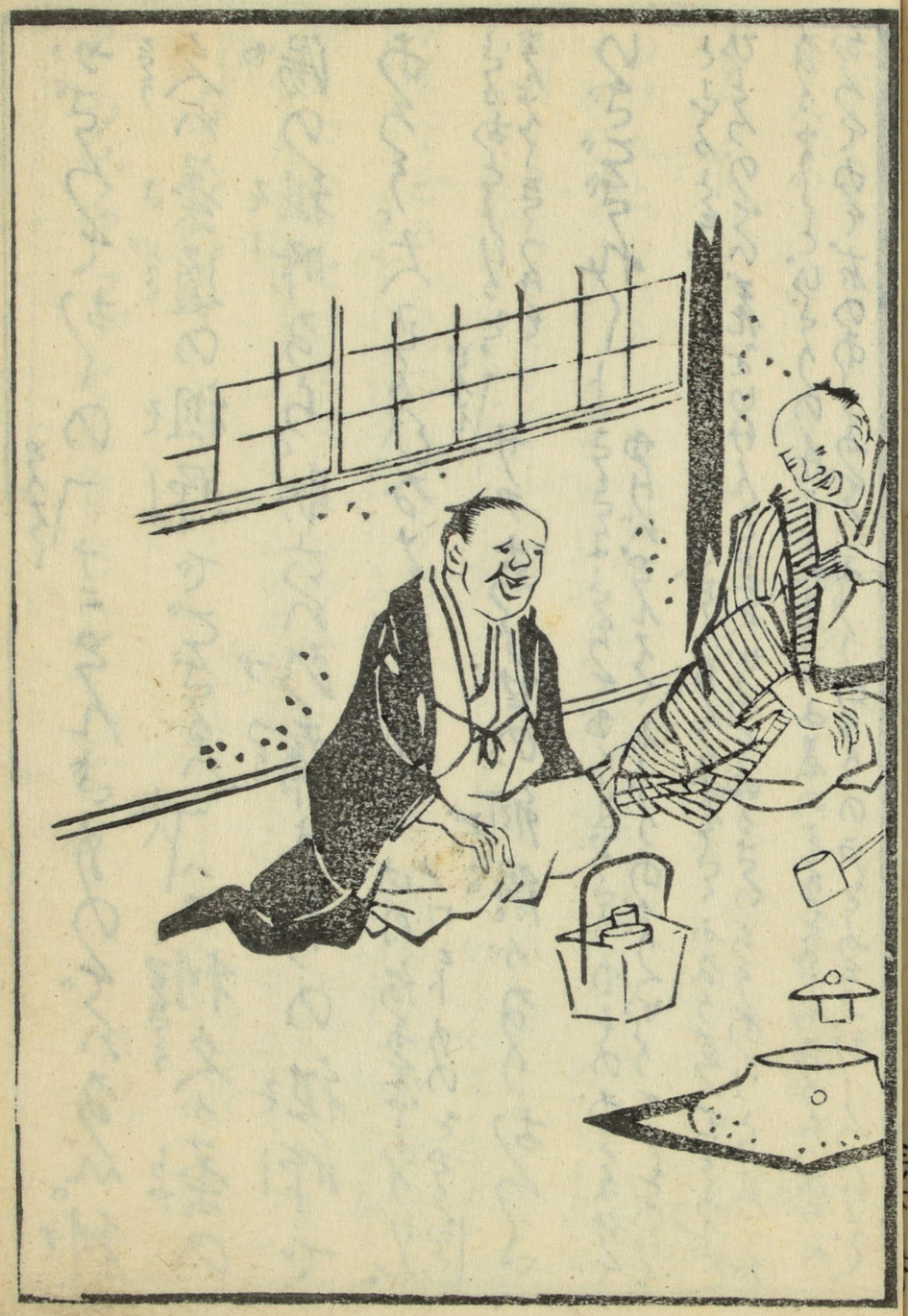
お出まんうとりのてまのぶん ト このてまのうちの出うたれ。 けきいぞうの中の臣と云へ
「なるほど」 「是ハ」めんト是へ「サアイく是へ」ポモ
おあさゑゴリヤ近所の朋友ども。かるれうら
伊孫者。也へ中稼きまうしう「是ハ」是へたじあくおあふ
かうりまうと「おまんがさ」お江戸じやるぷうふこまへ
ゑまうう世へさ「はい」さうぶおあ業のまうく世どぶ。
いつとれ是へよござうせ。ト いかさてくうくいうう。
ほんぶうきこへいこまうぐ
さうしぶ。ちやのせきへでるれたでかて
さうなのぶら。まうぬとのみもぐ。たうくうりいうぐ世へとおりひし

ところへ医者さまとうしろへさがるとこそ。
るんでもそのもとをとりまきうろうろし。ぶのうちより
うるづき「侍モシ」あるのさ。今お茶ぐらいまでまるそのでござり
やさ。今まづ〳〵おくるのさりや「イヤ
そのでやてぷんまつひのんをおとさんすると
トけ門やてむとこまりて「ものようらざるいざござれ「出案内
おくのをやさ。サア出ずんば「イヤまづおさきへ
トむうようのぶんたくをさきまとて。むさとのあんないを座へ
おりまちぶびるつんさかとんぶよいうあげうようんひ
入るうとのうけものるどんるんさて。「ホイ出ずまてう。
ぶつきづきざーをさてとくきてうーもん

トまさそくこときざーをおきそるたうまたひりでけれが。
保作さををんそさそい一ぺん出るをしてるものそのあと。
出もおるりじくたるまそるとくたひ出れが。「コリヤ
きさハもそのまるものとあとうとひ出ず
どのでやぞとりとくござらせるのじやト あきんう
おうちぶんたくいたものうけ〳〵ぶきざーをうけおきそ又たうる
トづぐのそあうもかうとたうるざのーあぜんのんまうべらしく
ちやをさそく上方のおへちやうとんたくはは
とりいづぐ花のきんとさるう付あたるの紙ぶつうとちやうんの
中へおとーるまき。「こまこわけつ
ひとちつのそて
のそさーとちやをつぶ〳〵おろると「保作
保作ぶ〳〵ぶんのあたををたうあべ
のむのく「ゴリヤアとんざたるーぶトちのうちは
ぶとらひるぶら

あるぞるのおちつくところをむくのようにそのそのあとをさぐるとハハロとさとこれも新をきるめるぐらのまんそとうれが。
ちゃ茶へさとこーあてあるのの赤だろうおどんで口あ、あろうの目をあのぐらこりゃどのぐや
ぐぐつトぐろとのんでおまりとこりゃどのぐや
アーも美い財分ろう。茶ぐ好で。ちゃ〜ちゃの書庫へも
出ろうぐ。茶佛ゆて茶をきるとらよ仏法へ。
笑さるもるひよめぐろ〜〜ろるぐや アハ〜〜ト仏門
アあろうもさとて。ろうぐちし。兵人の表紙あひよ こりゃア
ちろせをおちてあけろうち。ほひ。大あびきるぐら
稽古のまん茶ろをアんろあるよ。寿るろう外へ

あろうさが稽へ下ヨヤあそよ。大きる牛の子
笠がつるーてある。酒屋の小僧めがとんぐ下へ
アさとれてあきゆアぐろ イヤあ生るる雪雨
るどのせろ。あのうぐる笠であぐぐ ナニあへ
あんな笠をきるのろ。さとぐへ田舎ぐ。ろちぐ
國ぐと。蛇の目の傘とらふあぐ そーてあとこよ
ある。木像の仏さあへるのんぐ稼 あ生へ利久
居士の像ぐぐるて ヨヤとんぐあのとてへ



かざろてもらのこんさのでんるん。利
久の茶道の祖師でござる。ハア利久が茶の
湯の祖師なら。助六の祖師で
あろう。大ぶひなるのしさト内なのあるやありけん。
るあとりるを。サア来せの洞羅がなりあんす。
いざござれ〜ト
とるときうちあんさのもぜんりん丸をおろろちろんど
ひとろのくい花をりけんとどくかろてあるさのちろあけらまこん
あるゆうとひざうのよる花生右よ表のたるをあちあざら。塗へ
かろてあそ右のあ〜あそちおどりの戸をあまくあ〜つけく。

ひざうのあ〜あそちうちらのろぞ。
あんだりあるとあまろ。ドレあるやせ放ろ。
うろちざひとろあけてあんや。せうト
あけんとあろけられどあうちうろもちうろちあ〜つよくあさ
されがあるくあるざるをほるざちくちらこぶをらざ。戸をこぢまるを
ふ門ようふんだるあ〜と外うちあるきあひたろざるよかんて
あ〜りあざりの戸。ざろうさんのろんところぶれたの〜ぜんりん。
うそようどれさるろちうふんぞ〜のまく。花いけもあり知〜さく。
どろさうく〜をれるひゆうしよそとあ〜をあをいざ。ほ洗ろ弟の
ひとろおざちをけるそをと。ほるく〜ろうとりろてうろうさまま
さるをれ。そびいしあてざんのろぞあるろを考てろふうちて
陪
あのうく〜アタ〜〜。ドよ〜〜〜コリヤ
ざろうでやコレそそるあろあて
てござれ。ツレ。系附ざや

きうけどやトテのりんろうようそうのぐ。ほうたくよのませ
てらしものあーてをさきうるるぐらやうぐくとあきあがれだ。
うこひへいれおさそのみいあうろふゆゆくをおらくあきらてく
あいさうきるよ。隙さてくさたるどへめぐらしん
ぐうちふてうりて
お見をものてきへあてういぐれおりて。ほうを近て
えてけるあふどぐりやを。てまくくふとくことで。見て
ぐけるせ反。見袋さへるぐふ。暴持る見を
しをぐやくさ。イヤるうちへ何ものやせんが。
きるてぐ丸裸で。ろうちうあんどのはてめあへめぐらしい

お流れぐでぐざりやをハくくト。きくくたるひと
ちやせきんもちやちやふくたやり日ろてその日ろ
りとあざくきへあどりそおあ。るがたあくもあけんぐそくふ
りとまどひ。一れいきのべてけとろをちりぐそれうたたち
山をひどりふえそびぐち村りくうちくきぐそざあぐねの去ものくふ
りるるきよさあが井の
陰ちとりあり

あの母ふ結ぐ陰ろの流くて
ろ緒の碎も碾ぐ井の傍
山宿よさーかりろ村ぐおとりお屋敷ぐさの
早打とえんくて。二てうの駕ふ人見廿人だろり。

ゆうりく ふこと 衆うの外。驚の持さ形く細工を付て
引ぢうのぐら「エイ」く さてまめと「エイ サツサ
「さてまめとエイ サツサトとぶぐ〜ふ向金場の「サアく
まるいぐや だぐん〜。コレく 俳兵ヤイ。ちゃ番十八
そのぐみく。ぐうらの俳兵ぐうら俳あておきるふ。何〜て
居るぐん「サアく いろんうく トをとりて引
男八女のうぐらのあて新ぐうらのおうんべさく。
芝八けあよ氏神祭礼の芝居あて所のうんりめうんくまつともる
ぬ。この太郎十女ぐうあて今きあう引んのうたて まる所おうふやいぐ
あうう。うりの人を出そふあ。こる休日あて ぬくりのるくぜんうさあて

引ぐう出されて来るなれば「ほど」「ヤレコリヤく。ぐんま。
うぐうらとるまもるうく 人呼「エてまう
いうぐく。といひうふ。ぐるふ。おとぐるふく「エてまう
ぬうまいう。そのあうまぐぬぐや「たうのある。
いんま幕が張て。弟が後が出る所ぐやよ。進
るのとうりふ出さぐとといふふてぬ。おぐんぬんら
ぐや。どぬんぬいとまうんとぬうふる「俳兵ハテうりぐ
るけうあや。せぐとぐるいぐ。ぬうをるるうと
まうんう「エてこの驚ぐ移うらたぐまうんうと

むりよとろうとまくるふとれば、その内「コリヤ〳〵」と手帳
巻のうちのおさむらひ、せなさらく
いくさとぞ。「ソリヤ」お急ぐぞ。
マアこのうづらいてまつてうちあつとさんじ
ようんべ名のよザア〳〵やりかうせく。ト
山男うづらをさぐとうのるおまん女「さてまあとく。
うらぶんぢ西だんひとろふ
ヨイサツサく〳〵〳〵〳〵さつと八ぁんとろぷなんでも
山家ふ。菓人芝居があるとぁんくてぷその女
ぐ〳〵ふ。役ぐあろさもちろんぐやァ稽こ。

「されがさきゆうく」トそのあとをゐおくり西くゝみ。
此西くゝ兵衛のさいまんと
こんつゞくよのがりてうちんさきて。ちゐくのあるがさぎて右の
くさうと町の入ちちよりゝ人くるんぶゐしてだるくふ赤やゐんのうゝ
赤ぢわのあるゆうを往還ゆきてゐ
ゆうりこんへけき
「ナントどのようみゐとと
さるゝ。芝居をひとさきうんゆうどやア行くゝ。
「ひゝさまよごてざるゐ。コリヤいく土産ぶでさく
ト西がくゝの社地よゆきてくゝれがゝやおきの桑をくけて。
ゆくをたゝり。ゐあのゆ。西ゐ青天上あて。ちゐくゝ。ゐしゝの
くゝよをがゞさをうゞゝ。ちゐくゝゐゐ。此芝居木戸と
りよゆのゆるくゝひゐるけれがおけたゝ。あてゐうくゝの
赤ぢおるゝ。「カッチく」口上「そうざんく」。踊酒沙汰
ひゝくしゝ

内ざ「鰯十連。淺畑村茶屋より。酒持ち
太五右へ下さる。そべ形三袋。牛房十把
六右ゝ山の長德寺さまより西町の伊兵七へ
下さる。半紙十帖。煙附りの一ぞ三右ゝ帝後家
さゐより長松へ下さる。摺三束ゝ。そく二十枚。
紙半陳さゐより。る喰の持地ゝくゝぞさる
ひゝくしゝ「カッチく」そうざんく。此國性爺帝物
のぐんそぢまりさゆうふ「カッチ」カチく」トゝ

るが舞屋のしろあんどうの大ぶ三四さまろうの大ぶ
まんまるをさぐるをさぐるぐるぐるぐるぐるの十里ばかり
とせーまるまるまる

ゑいさりめん　ゑうぞ　あうそ　なんぜこちの
あんあんあん　ホ緒の　さりめん　さそ　ぜ
一コリヤ　ちりん　るぢ　あうぞ　なんで　あうぞ
牙が　後へ　和蔵内の　後ぢや　ホ牙さるのとこの
八内どの　牙が　母の　ぢゃ　ふ　茶漆の　ホ緒
ぎりめんぞ　ぞ　ぢゃ　ぞ　ぢゃ　ぞ　ぢゃ

虎拳
詰友

まつろうふくろうとてアきまをたべていろ〳〵みるのを
むれどもあきうぶごろ〳〵このおやぢのむすこのとうり内の母て
るりて出さるあく、りあんのきりのきんてゆくるをいきどおるあれば
ぢんくるるの〳〵ぞんるるら　ろりのおしゆうみきせろ〳〵よとぐ〳〵ヤろ
ろりのしゆうのるぶりちをぶぎんこせーよ　ゆのもきせるものぶ
ゆう〳〵きんりうるの上下あうーをどまるうとさせるぶようと
アとう内の母がこげちやのりめんぬのとさてみる上へきんるるの
上下をきせどれるておやぢをやう〳〵よるろうこさせげれたゆてて
ちづきろきゆう　「ろう　ぎんく　「あるやり〳〵
げんみかるると
トはり内ひろのゆぶの中みあて　「どんくく　「ぎろんく
ろうぢゆうゆるめくをふきさて
トろのとをむしゆうみとさてきてさろぎけるがこの蔭のおくよ
きろのものあるいろもありしがあきうよりのとさてきくさろぎ
さろおとよ。肩ぐりみかあふでろんとこのきろのきろ出し。
けれがきろのどもあびきとるく。みのものおとるおきろきろて

うみきろる　「ヤアく〳〵　孤が出おろとポリヤそろちやへ。
イヤこちらへもあるアやく〳〵　「ワアイ〳〵　「ドンチヤン〳〵
トりよくこるみくさろこぎころ　ろのの中へとび出せばさゆ　こるとりみて女子どもハるきらぐ〳〵
ちぐれーこちらそのこるまをふむゆちあーそをちぐゆちぐさろ格をひろう
くしーぐんこうたとをたるゆとぐ〳〵上を下へととるろへ　ごとう内ハ
おくびゆうりのあそこのきろゆよきりをつぐーいろをうー　るひ
あけきろんれが母ハむろふたちゆきーておろくみまろそるがく千
うくハきんーゆうふがえろちうあんどーひとろあてとんでいぐきろゆと
めぐりておひきろとこのそうじ　ぐうきうく。ほれ〳〵ホハたちを
ゆくるのぐらぐれとたくるる
このとろろを立出ゆくとそ

和蔵門おり　ひよろ稲べ迎てろー

虎の威をかりてかりうへの宿を打ること初原あぞいさうる

作者旅行中さまざまの風物にふれどもこころの
俗列落ちさうての潤稿なれば此編悪筆まづし
間てこゝろまを乱くやうて口編るにしまべし

木曾街道續膝栗毛三編下卷終

跋

関羽の赤兎馬項羽の騅若高き駿馬
小さぶれ名馬一九生涯の筆毛
弥次郎兵衛喜多八二人は志せ中国
他国に隅まで名所旧跡を尋ね狂歌
乃口種軽尻馬仕合で書る巻中功者

ゆゑ此八中山道京都の方歸り旅
巷中書を近江路や二人がみの跡
こゝ業あく百里のゝとせ勞苦
遠島馬糞中と千里名島ゝ伝樂
乃馬嘶下ま情の衛門十偏庶古
小栗屋ゝ市ゝしゝと子ゝ十人の屋敷

よ実り鬼麻毛のあいはとそ此繪冊毛
乃尻馬よ家て一筆書ゝの云爾

文化壬申睦月

緑亭可山識

可山

續膝栗毛四編　十返舍著　全三冊　續出

江戸みやげ　大哥舞伎　贋の旅芝居　同作　全三冊近刻

續膝栗毛五編

千返舍著

全三冊 近出

書林

大坂心斎橋唐物町 河内屋太助

江戸本石町十軒店 西村源六

同 通油町 鶴屋喜右衛門

同 同所 村田屋治郎兵衛

同 小網町 永樂屋西四郎

19